

第5節 神像を祀ることからみるフエ地域の竈神

ここでは、ディアリン村で製作される小型の神像を祀ることからみえるフエ地域の竈神について考察したい。

(1) 台所の変遷と竈神の神体と神像の変遷

①台所の変遷

フエ地域では、各家によって差はあるが1980年頃まで土製支脚を実際に調理の道具として使用していた。その後、壊れやすい土製支脚に変わり五徳や土製の焔炉などが使用され、ガスコンロが普及するのは1990年前後からである。現在でも土製支脚を実際の道具として用いている家もある。また、ガスコンロを使用せず五徳や土製の焔炉で調理をしている家やガスコンロと併用して五徳などを用いている家も少なくない。

土製支脚を使用していたときは地炉に置かれていた。その後、そのまま地炉で五徳や土製焔炉を置いて調理をしている家もあるが、多くの家では立って使う台付き焔炉を作り、そこに五徳や土製焔炉を置いている。そして、そこにガスコンロが置かれるようになる。台付きの焔炉がいつ頃作られたかについては家によって異なるが、1980-1990年頃に家や台所の修理や改装をしたときに台付き焔炉を作り、そして土製支脚から五徳などに変えたという話が多く聞かれた。

②竈神の神体と神像

現在はほとんどの家で小型の竈神の神像が神体として祀られている。土製支脚を使用している地炉で五徳などを使用している家でも、壁の上部に祭壇が作られ小型の神像が祀られている。

しかし、多くの人が土製支脚を実用品としていたときは、土製支脚が竈神であり神体であった。そのため、第3章でも述べたが、土製支脚を使用しなくなっても1985-1990年くらいまでは、竈神を祀るために地炉に土製支脚を置いて、時々火を入れて温めていた家もあった。次第に土製支脚そのものから小型の土製支脚を象った神像が神体へと変わり、各家で祭壇を設けて祀られるようになっていく。

そして、新たな小型の神像がディアリン村で作られた。竈神三柱を象った神像は、1994年チュン・ヴァン・ダット氏が創造したものであった。その後、ディアリン村の製作者のあいだでダット氏のオンタオ・グオイの型を真似て作るようになり、広まっていった。現在ではフエ地域の人々に最も祀られている神像となっている。

③台所の変遷からみる竈神の神像

現在フエ地域でよく見られる小型の竈神の神像を祀るようになったのは、比較的新しいことであった。

フォックティック村では早くから土製支脚とは別にオンタオ・クアンが作られ、祀られていたが、フエ市内でもほかの地域でも人々にとって土製支脚が竈神であった。そのため、土製支脚の実際の使用がなくなってもしばらくは神体として祀られていたのである。ディアリン村で神像製作を始めた頃は、実用品でもある土製支脚オンタオ・ロンが多く作られていた理由でもある。しかし、次第に小型の神像を祀る家が増えてきたのには、台所が地炉から台付き焔炉に変わったことが非常に大きく影響していることが明らかになった。

また、最初の小型の神像が、土製支脚を象ったものであったことも人々が土製支脚から小型

の神像へと竈神の神体を移行させることを容易にしたのだろう。今でも、土製支脚を象ったオンタオ・クアンが竈神の本当の神体であると考えて祀っている年配の人たちが少なくない。なかには土製支脚を神体として今でも祀っている人もいる。実際に土製支脚を使用していた人たちにとって、「土製支脚が竈神」であったということが大切なのである。

竈神三柱を象ったオンタオ・グオイが人気になったのは、実際の道具として土製支脚が用いられなくなり、若い人たちにとって土製支脚が竈神という意識が薄くなっていたことも関係があるのだろう。昔話などで語られる三柱の竈神のほうが竈神としてより身近な神なのかもしれない。

しかし、年配者も若い人も年齢に関係なく台所の形態が変わり神体が変わっても、新たな形の神像を置いて祀り続けている。このことが重要であり、そこにはフエ地域の人々のどのような観念があるのだろうか。

(2) 新たに作られた神像からみるフエ地域の人々の竈神

台所の形態が変わり、もともと神体としていた土製支脚を使わなくなっても、新たに竈神の神体を作り祀ることを続ける背景について、第3章で考察したように、厳しい生活環境のなかで災いの原因をチャンパや戦死者など土地と結びつく霊魂や孤魂としてきた。その災いを回避するために多くの儀礼が行なわれてきた。同時に正しく祀ることを心がけてきた人々の暮らし方が関係し、今でも古い竈神の見送りが継続されていることもその一つである。

そのようななかで、小型の神像は祭壇で竈神を祀るためのものだけではなく、陰暦12月23日に行なう新旧交換の儀礼で用いる祭具として存在している。フエ地域の人々は、竈神儀礼の最後に神像を見送ることで竈神が天に昇り、家族の願いが聞き入れられると考えている。新しい1年の保護を求め、祈願するために竈神の神体としての小型の神像を用いているのである。そこにフエ地域の人々の竈神への願いをみることができる。

物質文化からみた小型の神像は、三柱を起源とする竈神の儀礼を継承するためにフエ地域で独自に展開された竈神の神体(=「モノ」)であるといえる。そして、そこには物理的な機能を伴うものから象徴的な機能への移行をみることができる。

最後に神像を製作している人々のことを触れておきたい。ディアリン村の現在の製作者は、神仏の製作に関わる専門の職人ではなく、伝統的な窯業の職人でもなく、重労働であったレンガ生産から少しは楽にできるだろうとの理由から竈神の神像の生産を始めた人たちである。職業としての一つの選択であった。そのため、製作の工程で神像に魂を入れる儀礼などは行なわれない。職業の始祖への祭礼もなく、自分の家の竈神の祭壇に拝礼し、窯での焼成のときに線香を供え拝礼するくらいである。しかし、製作者たちはフエ地域の人々と同様に竈神に対する信仰は厚く、自分がその竈神の神像を生産しているという意識と誇りは持っている。それは丁寧で細かな作業や、綺麗に完成させることを心掛けて製作する姿にあらわれている。廟などに祈願に行くことも魂を入れる儀礼もないが、作業全体をとおし神像に魂が込められていくように思える。

現在、神像生産の現状は非常に厳しく、生計を立てるのが難しい。そのことからヴォー氏兄弟の息子たちもムオイ氏の息子も親の手伝いはするものの、引き継いでいく予定はない。今後、竈神の神像がどのように変わっていくのか見守りたい。

第5章 物質文化からみた竈神（2）

—王都フエの農民が願いを込めた儀礼版画—

本章では、フエ地域の竈神を祀る儀礼で使用されるシン村の版画について、物質文化から竈神を論じていきたい。版画の製作者への聞き取りを中心に、農村であるシン村での版画業の実態を明らかにし、竈神版画に描かれたモチーフを読み解き、フエ地域の人々の竈神に対する観念について考察する。本稿では、便宜上竈神を描いた版画を、「竈神版画」と呼称する。

第1節 ベトナムの竈神版画

フエ地域の送神儀礼では、1年間祭壇で祀った竈神の神像を廟や神聖な木の根元に置き、天に送る儀礼が行なわれる。その際には必ずシン村で製作された竈神版画が燃やされる。儀礼の前には市場や路上など、いたるところで竈神の神像とともに売られるシン村の版画だが、他の地域にはほとんど流通されていない。しかし、18世紀のテクラ神父の資料には、竈神の祭祀で竈神が描かれた絵を貼り、正月に交換することが記されている。

（1）ベトナム国内で描かれた竈神版画

ベトナム国内で描かれた竈神版画は、シン村以外に現在確認できるものとしてドンホー（Đông Hồ）版画とアンリ・オジェ（Henri Oger）編纂の版画がある。オジェ編纂の版画については第1章で述べているため省略するが、以下にドンホー版画とベトナムの版画に関する研究について触れておきたい。

・ドンホー版画

ベトナム北部バックニン省ドンホー村で製作されている¹。12世紀頃にはベトナムで木版印刷が行なわれていたことが史書研究から確認されている²が、ドンホー版画の起源はわかっていない（川上 2001:53）。17-18世紀にドンホー版画は発展したといわれ、色彩鮮やかな多色重ね刷り技法が特徴の版画である（岩井 1997:72）。絵柄は、神仏像や故事画、吉祥図、生活風俗絵などであり、年画や鑑賞用として飾られる。ホーチミン市の家庭でもドンホー版画の吉祥図や年画が飾られている。

ドンホー版画とオジェ編纂の二つの竈神版画はシン村の竈神版画と比べると印刷技法だけでなく描かれているモチーフにも違いがみられる。

（2）先行研究と本章の研究の視点

①ベトナムの民間版画の研究

ベトナム民間版画については、おもにドンホー版画による研究が行なわれてきた（Nguyễn Bá Vân; Chu Quang Trú 1984）。川上崇は、ベトナム社会主義体制下でのドンホー村の手工芸、木版画印刷業の展開過程について論じており（川上 2001）、シン村版画の歴史的な変遷を考えるうえで参考となる。中国版画の研究者である田所政江と三山陵がシン村の版画について取り上げている。田所はベトナムの民間版画を紹介するなかでシン村の竈神版画も載せている（田所

¹ 民間版画にはドンホー版画のほかにハノイのハンチョン（Hàng Trống）通りにあるハンチョン版

² Trần Quốc Vượng, Đỗ Thị Hào 2014:117。

2000, 2008)。三山はシン村の版画を多数提示して事例報告をしている（三山 2014）。しかし、シン村版画に関する主要なベトナム語の資料が参考されておらず、実際の現地調査は行なっていない。

シン村版画の研究は、前述したグエン・ヒュウ・トンのフエ地域の伝統的手工芸の発展と形成の視点からの研究（Nguyễn Hữu Thông 1994: 127-143）、フィン・ディン・ケットのグエン・ヒュウ・トンの研究を参考にしつつ、シン村で版画製作に関わる人にも視点をおいた研究がある（Huỳnh Đình Kết 2001）。また、チャン・ダイ・ヴィンはフエ地域の民間信仰のなかで、シン村で製作される版画について記している（Trần Đại Vinh 1995: 176-184）。これらは、伝統的な原料や製作工程に関する詳細な記述がある一方で、現在のシン村版画業の実態について多くは記されていない。また、グエン・ヒュウ・トンとフィン・ディン・ケット両研究者はモチーフを分析しているが、そこに版画製作者への聞き取りがされているかは不明である。

以上のようにベトナムという国の社会や文化の視点から、ベトナムの民間版画を研究したものは非常に少ない。現地調査に基づいたシン村版画の研究はフエ地域の研究者が行っているが、しかし、伝統的なシン村版画の手工芸の面が注目されてきた一方で、農村シン村の人々の版画製作との関わりの実態、版画製作や描かれたモチーフに対する観念は報告されていない。シン村の竈神版画の特徴は、描かれたモチーフにある。しかし、これまでベトナムで描かれた他の竈神版画とのモチーフの比較研究はない。

②本章の視点 —物質文化からみた竈神版画—

本章では民俗学的視点から物質文化である竈神の版画について論じていく。農村であるシン村で版画製作に携わる人々への聞き取りを中心に、村における版画製作の実態とその変遷や版画の種類や変遷などから現在のシン村版画の実態を明らかにする。そして、竈神版画に描かれたモチーフを研究者と製作者の認識、またドンホー版画やアンリ・オジェ編纂の版画との比較をとおして、モチーフに込められたシン村の竈神版画の特徴を考察する。

第2節 シン村版画の歴史と伝統的版画業

(1) シン村の概況と歴史

シン村は フーヴァン（Phú Vang）県マウタイ（Mậu Tài）社に属する。古くは「頼恩（ライアン Lai Ân）」と呼ばれ、『烏州近録』³には思榮県 67 村のなかの 1 村として記された中南部ベトナム（ダンジョン Đàng Trong）地方でかなり早い時期に形成された村のひとつである。今も村の入り口には「Lai Ân」と書かれている。シン村の北側と西側は、フウオン河に接している（図 5-1）。

頼恩は、16 世紀中頃から商業面で豊かな場所であり（Nguyễn Hữu Thông 1994: 154）、当時は、地理的にダンジョン地域の大きな商業都市、清河（タインハー Thanh Hà）や褒榮（バオヴィン Bao Vinh）と近かったため、商業面で影響を受けていた。しかし、頼恩の基本は他の村落と同じように農業村であった（Nguyễn Hữu Thông 1994: 154）。

³ 1553（1555）年、楊文安により編纂されたフエ地域の地誌。現存する『烏州近録』は加筆されている。

また、16世紀の頼恩村には、化州（ホアチャウ Hóà Châu）地域の名所といわれる崇化寺（スンホア寺 chùa Sùng Hóa）があり、毎年、祭礼の時期には三司⁴や衛所衙門の官吏などが揃って参拝に來ると記録されている⁵。

グエン・ヒュウ・トンによると、生業の基本は農業であったが、近隣の商業市場の影響によりシン村にもさまざまな職業が形成され、経済や社会、人口の変動を経験してきた。陶磁器売買をする商人、各種手工芸やカゴ編み、ノン（nón 藁で作られた円錐形の笠）、マーの製作が行なわれ、そのなかで最も大きな割合を占めるのが版画業であった（Nguyễn Hữu Thông 1994:155）。

シン村の面積は2.5 km²、13集落（xóm）、三つの小村（giáp⁶）に分れ、公田約200畝（Nguyễn Hữu Thông 1994:154; Huỳnh Đình Kết 2001:15）、人口は約1600人である（Huỳnh Đình Kết 2001:15）。



図 5-1 シン村の位置
Google Map をもとに筆者加筆

（2）シン村版画の歴史 始まりと迷信異端の禁止と伝統復興の現在

シン村の版画業の始まりについて言及する資料はみつからない。しかし、グエン・ヒュウ・トンは、マーや儀礼版画の需要があったことは明らかであると記し（Nguyễn Hữu Thông 1994:156）、版画業の始まりはおそらく15-16世紀の『烏州近録』に記載された崇化寺の祭礼のために作られたのではないかと考えている⁷。フィン・ディン・ケットも崇化寺はシン村の信仰生活において中心的役割を担っており、供物としてシン村の儀礼版画が発展していったと記している（Huỳnh Đình Kết 2001:18）。しかし、現時点では崇化寺とシン村版画の関係性は未詳である。

ベトナム戦争が終結する1975年以前、シン村では50家族ほどが版画業に携わっていたという⁸。戦争が終わり、南北が統一されると北ベトナムの社会主義政策の影響が中南部地域にも及び、迷信異端が厳しく取り締まわれた。シン村の版画も例外ではなかった。現在、シン村で版画製作を専業で行なっているキー・ヒュウ・フォック（Kỳ Hữu Phước）氏（以下、フォック氏と略する）が2013年6月に語った話によると、1976-1996年「迷信異端」が禁止されていた時期に村の多くの人々が版画業をやめていき、1996年に版画業が再開されたときには版画の型を持っている人はわずかであり、版画業をする人は非常に少なくなったという。

⁴ 「三司」とは都司（軍事）、承司（官吏の勤務評定）、憲司（訴訟）を司る官庁をいう（大西2003:124-126）。

⁵ 『烏州近録』巻之五 原文『名藍 崇化寺 思榮縣頼恩社。前邊靈江、後榮大澤。懷才江抱於乾方、崇福碑屹於坎位。神像穹窿、僊宮巍口。節且習儀、則三司及衛所衙門衛所等官借至、衣冠禮樂翕集如雲。又一祈一禱、隨感隨應、化州之名寺也。』

⁶ 10戸を1甲とする末端の行政単位。

⁷ 2013年グエン・ヒュウ・トン氏のご教示による。また、版画の生産は他の村にも広がっていたとも述べている。

⁸ 2013年グエン・ヒュウ・トン氏のご教示による。

(3) 伝統的版画業と職業始祖への祭礼

シン村の版画業は農業の閑散期に村の多くの人たちによって行なわれていた。儀礼版画のおもな種類として、平安祈願のための神像版画、家畜家禽繁盛のための動物版画、形代としての人物版画などがある⁹。ここでは、シン村の伝統的な版画業と職業神を祀る儀礼について述べる。

・シン村の伝統的版画業

グエン・ヒュウ・トンとフィン・ディン・ケットによると、版画に使用する材料は、すべて自然界のものであり、その他の染料となる植物は山林で、胡粉用の貝(điệp)はトゥアティエン・フエ省の広い干潟で採取した。版画製作は分業制で行なわれ、原料収集、版木作り、胡粉作成、色の調合、印刷、彩色のグループに分けられ、貝の採集は重労働のため、若く体力のある男性たちの仕事であった。貝から胡粉を作成するのは、男女がペアになり歌の掛け合いをしながら行なわれた。一晩中、臼で貝を砕き多くの手間がかかる作業のため、農村全員が参加して行なわれた。その他、色の調合や印刷、彩色などは女性や子どもたちも手伝い作業していた(Nguyễn Hữu Thông 1994 : 156-161; Huỳnh Đình Kết 2001 : 64-83)。本章末に版画の原料、色の調合、製作工程、道具などを掲載している(表 5-1,5-2,5-3,図 5-2, 137-140 頁)。



写真 5-1 シン村の亭 新年儀礼 版画業の始祖への儀礼 陰暦 1 月 9 日 (2016.2.16)

・職業の始祖への祭礼

シン村の版画業に関わる人たちには、ホイ・ボンゲー(本藝会 Hội bốn nghệ) というのがある¹⁰。このホイ・ボンゲーには、二つの機能があり、職業の祖先を祀ることと職業の相互扶助であるが、今は職業の祖先を祀るときのみ機能している。

陰暦 1 月 9 日はシン村の亭で村の城隍神や始祖を祀る新年儀礼と同時に版画業の始祖への儀

⁹ シン村版画業の版画業の原料を含めた製作工程についてはグエン・ヒュウ・トンとフィン・ディン・ケットが詳細にまとめている(Nguyễn Hữu Thông 1994 : 156-161; Huỳnh Đình Kết 2001 : 64-83)。シン村の伝統的儀礼版画については、民具マンスリー49 (2) (鍋田 2016b) で紹介している。

¹⁰ グエン・ヒュウ・トンは、シン村の版画業にはホイボイ(Hội bỏi) という相互扶助組織があると記しているが、村の人の話では、ホイボイは胡粉を作り塗ることを指し、職業を助け合う意味ではなく、またホイボイは 1954 年に南北分断し、紙がクアンビン(Quảng Bình) 省からフエに入らなくなったためできなくなったという。

礼（cúng tổ nghề）も行なわれ、版画生産に携わる人が参拝に訪れる（写真 5-1）。亭での儀礼の準備は当日にホイ・ボンゲーのメンバーなどが行ない、ドラの音を合図に祭礼が始まる。村の長老や会のメンバーなど数名の男性がアオザイを着て正装し拝礼するが、村の人々はほとんど訪れない。少人数で静かに進められる。そのなかで 2016 年の儀礼には 2 人の女性が礼拝に来ていた。次の（4）で紹介するファン・ティ・キー氏とチャン・ティ・セン氏である。

翌日 10 日は、亭の前で奉納相撲が行なわれる。村のひとによると、昔は版画の製作には原料の採取など体力が必要だったため、相撲でその力を神様にみせたのだという。早朝 5 時のまだ暗いなか、老若男女大勢の村の人たちが観戦に訪れ、奉納相撲が開始される。幼い男児の取り組みから徐々に年齢が上がり、村の人たちも盛り上がっていく。前日に儀礼が行なわれた同じ亭とは思えないほどの活気である。昔から、そして今もシン村の人たちにとって、この奉納相撲は大切な娯楽の場であることを物語っている。

シン村の相撲は伝統的な祭礼として有名になり村の外から観客が多く訪れる。そのため、亭の前で村の人々だけで奉納相撲を行なった後、村の広場に設置された競技場で村外の観客を入れて再度盛大に行なわれる（写真 5-2）。その競技場には、「頼恩」と記された旗が掲げられている。



写真 5-2 亭での奉納相撲（左）村の広場での相撲（右） 陰暦 1 月 10 日(2016.2.17)

（4）4 人の女性による版画業

村の人たちによると、以前、村のなかで大きな規模で商売をしていたのは 4 人の女性であったという。彼女たちの名前は、ファン・ティ・キー（Phan Thị Kỳ）88 歳（2017 年当時）、レ・ティ・チャウ（Lê Thị Châu）88 歳（2017 年当時）、レ・ティ・ニョウ（Lê Thị Nhỏ）、チャン・ティ・セン（Trần Thị Sen）76 歳（2017 年当時）である。ニョウ氏とチャウ氏は姉妹であり、ニョウ氏は亡くなっている。しかし 3 名は健在であり、以下に彼女たちの話を簡単に記しておきたい。

①ファン・ティ・キー氏は 19 歳（1948 年）から版画業に関わっている。息子が 1 人いるが版画の製作はしていないため、村の人たちを雇って版画業を行なってきた。キー氏によると、それぞれ個々に商売をしてきたため、シン村全体で協力して版画を生産することはなかったという。キー氏の家では、版木作りや胡粉用の貝を取りに行くときには人を雇っていた。

家にあった多くの版木は、2016年にフエフェスティバルの関係者が来て売ってしまい、今はほとんど残っていない。

②レ・ティ・チャウ氏は25歳（1944年）から版画業を始め、72歳（2011年）まで続けていた。10人の子ども（息子4人、娘6人）がおり、家族で作業をしながら、人も雇いながら版画を生産していた。色の原料となる植物を森に取りに行き、版木を彫るなどは人に頼み、胡粉用の貝は買っていたという。現在はシン村に住む娘のチャン・ティ・ノー（Trần Thị Nở）氏が夫婦で版画の製作を続けている。陰暦1月9日の村の亭での儀礼には、チャウ氏から引き継ぎノー氏が参拝している。また息子チャン・シー・クオック（Trần Sỹ Quốc）氏も版木を所有し、以前は印刷をしていたが、現在はマーの紙銭や紙服用の柄の入った紙などを機械印刷し製作している。

③レ・ティ・ニョウ氏は、息子のファン・ヒュウ・ソン（Phan Hữu Sơn）氏が数種類の版木を所有している。村の人に版木を貸して印刷したものをまとめて市場などに販売している。ソン氏は版画の仕事には関わっておらず、母親のニョウ氏がどのように商売をしてきたかもよくわからないという。

④チャン・ティ・セン氏は、20歳（1961年）から仕事を始めている。自分の両親、祖母が版画を製作していたが、その前の代についてはわからないという。子どもが11人（息子8人、娘3人）おり、ほとんどは家族で仕事をしていたが、村の人も雇い、今でも版木を貸している。現在は息子の嫁4人に版木を譲り、それぞれの家で版画の印刷をしている。嫁たちが印刷した版画を集めて市場などに売りに行くのは、セン氏と同居する10番目の息子チャン・ヴァン・ムオイ（Trần Văn Mười）氏の仕事である。嫁に版木を譲っても、セン氏の家にはまだ多くの版木が所蔵されていた。しかし、2016年に使用しなくなった多くの版木を欲しい人がいるということで売ってしまい、今はほとんど残っていないという。

4人の女性は、昔は自分たちで舟に乗りドンバー市場まで版画を売りに行っていたという。特に女性の仕事と決まっていたわけではなく、男性が行くことも、男女で一緒に行くこともあった。1975年から始まった迷信異端の禁止では、1986年まで商売ができず、その中でも1978年くらいまでの3-4年が最も大変だったという。しかし、その間も人には知られないように隠れて生産を続け、版画を売りにも行っていた。そして、陰暦1月9日の職業神への儀礼には、4人合同でお金を出しあい、夜中3時頃に密かに亭に行き拝んでいたという。今はそれぞれ、キー氏もセン氏も自分で祈願に行き、チャウ氏は娘のノー氏が参拝している。

村の人や4人（3人）の女性とその親族の話をもとめると、1975年以前にシン村の版画業を大きく商売としていた4人の女性たちは、基本的には家族を中心に仕事をし、4人に相互扶助的な関係はなく、それぞれが村の人を雇い、版画を生産し売りに行っていた。キー・ヒュウ・フオック氏が1975年以前に版木を彫っていたという話や版画の製作に深く関わっていたという話は聞かれなかった。おそらく、迷信異端の禁止からシン村の版画が再び伝統的手工芸として関心が向けられるまでのあいだに、シン村の人々の生活も大きく変わっていったのだろう。それについてはまた別の機会で述べたい。

(5) 現在のシン村伝統的版画の継承者 キー・ヒウウ・フォック氏

フォック氏は、現在シン村の版画製作を専業で行ない、版木作りのできる唯一の職人である。伝統的なシン村版画を絶やさないために、もともと版画職人であり版木作りをしていたフォック氏がシン村で昔の版画の色彩の復元を含め版画の継承を担うことになった (Nguyễn Hữu Thông 1994 : 162)。フォック氏は9代前に祖先がシン村に移住してから版画製作を始めたというが、所有している家譜¹¹には版画業についての記載はない。現在も手工芸で版画を製作しているが、以前のように自然界から採取した原料を使用することはほとんどなく、染料では、わずかに黒色を台所(炉)の灰と植物(モモタマナの葉)で調合しているのみである。また、フォック氏は伝統的な儀礼版画だけでなく、最近は観光客向けの版画も製作している¹² (図 5-3 (1)(2))。

	色	原料	調合・その他
主色	①黄色 Màu vàng	ハイノキの葉 (Cây Đung) エンジュの花の蕾 (Hoa Hộc)	一緒に混ぜて炊く
	②オレンジ色 Màu cam	壊れたレンガ (gạch mục)	湿度のある状態で時間が経過し粉々になったレンガ
	③緑色 Màu xanh lục	クチナシ (cây dành dành)	
	④赤色 Màu đỏ	スオウの木の根 (rễ cây vang)	赤色よりはピンクに近い色
	⑤紫色 Màu tím	ツルムラサキの実 (quả mồng tơi)	
副色	①白色 Màu trắng		
	②黒色 Màu đen	モモタマナの葉 (lá bàng) 竈の灰 (tro bếp)	

図 5-3 (1) フォック氏の色の原料と調合

写真					
名称	ハケ (cái phết)	パレン (mo cau)	筆 (Bút)	スポンジ	皮手袋
原料	原料: 乾燥した松の葉 (lá thông khô)	原料: 檳榔樹の果苞 (mo cau)	原料: バイナップルの根 (rễ cây dứa)	以前: 乾燥したヤシの殻の繊維を使用	
用途	ゾー(Dó)紙に貝胡粉を塗る	インクを塗った版木にのせた紙を上からなでる	印刷された紙に色を塗る	版木にインクを塗る	インクを塗った版木にのせた紙を上からなでる
写真					
名称	臼(cối) 杵(chày)	のみ(dúc)	容器 (chén màu)		
原料					
用途	黒色を作るために使用 灰とモモタマナの葉を細かく砕く	版画の型を彫るための道具	色を入れる容器		

図 5-3-(2) フォック氏の製作道具

¹¹ フォック氏の所有する家譜は、フランス語で記された証明書が1943年に発行されている。家譜は漢文表記、手書きで記されており朱色の表紙には「祁有笙奉安」とある。家譜は保大8(1933)年に編纂され、8代目までが記されており、初代キー(Kỳ)氏の職業は茶医とある。

¹² シン村版画の版画については(鍋田 2016 b)『民具マンスリー』49(2)に載せている。

第2節 シン村の竈神版木とモチーフ

ここでは、まず現在シン村で使用されている竈神の版木について述べ、次に版画に描かれたモチーフをグエン・ヒュウ・トンとフィン・ディン・ケットの解説から整理する。その解説をもとに筆者がシン村で調査した竈神版画と比較する。

(1) シン村の竈神版木

フォック氏によると現在、シン村にはおそらく30個ほどの竈神版画の版木があるという。そのなかに、シン村内外に住むトーチャム(thợ chạm 彫刻職人)に作ってもらったものもある。現在、村の人は版木の修理などはフォック氏に頼んでいる。フォック氏は、トーチャムは儀礼版画についての理解がないため、伝統的な版画とは異なる左右の配置や間違っただモチーフを描いた版木を製作してきたとして、9年ほど前から間違っただ版木を処分し、正しいものと交換しているという。しかし、何が伝統的に正しいのかフォック氏がどのように判断しているのかが不明な点もある。筆者がシン村で確認できた竈神版画は以下の3種類である(写真5-3)。



写真 5-3 竈神の版木と版画

①版木と版画(左)

②版木と版画(中央)

③版木と版画(右)

①の版画はもっとも多く流通している種類のものであり、送神儀礼の前になると竈神の神像とセットにして市場などで売られている。この版画には中段の左右のモチーフの配置が逆になった2種類の版画がある。上の版木と下の印刷された版画では左右の配置が同じであり、印刷すると逆になるのがわかる。フォック氏は①の版木は正しいが、下の版画は左右の配置が逆であり、間違っただ版木で印刷されたものであるという。②はフォック氏が製作した版木とその版画である。①の版画と較べると左右の配置が逆になっているのがわかる。③は1番下にガスボンベが描かれている。フエ地域では1980年代中頃から1990年代にかけてガスコンロが使用され始めたため、ガスボンベが描かれた版画は1990年代以降の新しいモチーフだと思われる。フォック氏は、竈神は炉にいる神でありガスボンベが描かれるのは間違っているという。

(2) 研究者によるモチーフ解説

2人の研究者、グエン・ヒュウ・トンとフィン・ディン・ケットが記した解説は以下のとおりである(図5-4) 2人は同じ配置、同じモチーフの版画を解説していると考えられるが、左右の表現については異なることに注意したい。グエン・ヒュウ・トンは版画のなかから外に向けて(竈神三神を中心に)記し、フィン・ディン・ケットは外から版画を見たときの左と右で記している。

① グエン・ヒュウ・トンの解説 (Nguyễn Hữu Thông 1994 : 163-164)

版画の中心には女性1人と男性2人の3人の人物が描かれる。3人は温和で楽しそうな顔をしている。家は柱間一間と二つの庇、屋根は瓦で覆われ、別棟と一斉に咲いた花が左右対称で描かれている。

道具、事物、動物が三層に分かれて配置され、それぞれのモチーフが個々に意味をもつ。左側(男性)は、武器、男性の生活(働く)道具であり陽の原理をあらわす。そのため、丸いもの: 石灰の瓶、酒を入れる瓢箪、扇が描かれる。右側(女性)は陰の原理を表象し、四角いもの: 四角の鏡、四角の羽毛扇、化粧をするための紅と白粉が描かれる。左右の配置は「天円地方」であり、円満や平和、人々の発展への希望をあらわしている。

下層には、真ん中に山盛りの果物があり、両脇に下男下女が立つ。その両側には豚、馬、犬、山羊、水牛、鶏、アヒルなどがいる。果物は豊作、動物は家畜の繁殖を象徴している。

② フィン・ディン・ケットの解説 (Huỳnh Đình Kết 2001 : 87-88)

竈神版画は、紙を二分し空間を二つに分ける。その空間は二つの世界をあらわす。

上部の空間には、瓦葺きの屋根をもつ口字形の家に灶府神君三位が配置されている。三位は正装し髪を巻いている。三位の右に集められた5品は、調理道具: 炭の焜炉、扇または玉ねぎ、やかん、すり鉢、蓋付き瓶である。左に集められた5品は、生活道具: 菓子型または小麦粉をふるう杵、野菜、つまみ付き瓶、円形のもの、足付きグラスである。

下部の空間は、真ん中の盆にご飯(おこわ)が盛られている。その両側に男1女1が1人ずついる。左側に水牛、子牛(または犬)、アヒル、鶏、右側に象、豚、山羊とロバ。

版画の全景は満ち足りた豊かさをあらわしている。神の世界と民間の世界の調和と親密さを描写する。

	グエン・ヒュウ・トン			フィン・ディン・ケット		
空間	三層			空間を二分 2つの世界		
上段	屋根瓦、1間庇2つ、両側: 別棟と満開の花			屋根瓦、口の字形の家		
中段	右側(女性) bên phải(nữ hũu)	中央	左側(男性) bên trái(nam tả)	左側 tả vu	中央	右側 hữu vu
	陰(四角)地 羽毛の扇 四角の鏡 紅・白粉	女1人男2人 温和で楽しい顔	陽(円)天 武器・生活具 扇 瓢箪(酒) 石灰瓶	生活道具 お菓子の型 野菜 つまみ付き瓶 足付きグラス 円形のもの	灶府神君3位 正装(朝服) 丸めた髪	調理道具 炭の焜炉 扇(玉葱) やかん 蓋付き瓶 すり鉢
下段	右側	中央	左側	左側	中央	右側
	豚、犬、 山羊、水牛、 牛、鶏、 アヒル	山盛りの果物 下男・下女	豚、犬、 山羊、水牛、 牛、鶏、 アヒル	水牛 子牛(犬) アヒル 鶏	もち米の菓子 (五穀) 下男・下女	象 豚 山羊 ロバ(?)

図5-4 グエン・ヒュウ・トンとフィン・ディン・ケットの解説

以上が、研究者による竈神版画の解説である。グエン・ヒュウ・トンは、解説に使用した版画を提示していないが、1994年という年と解説内容を考えると、おそらく最も流通している版

画（写真 2①の版木）であろう。2人の解説では、まず空間区分に相違がみられる。フィン・ディン・ケットが区分した二つの世界とは、神と民間の世界を指していると思われるが、両研究者とも空間区分についての詳しい説明はない。

上段に描かれたモチーフでは、両研究者が記しているように瓦屋根がはっきり描かれている。しかし、屋根の上に描かれた宝珠については触れていない。多くは寺院や廟、祠堂などの屋根に置かれる宝珠が、なぜ家の屋根にも置かれているかについて解説はされていない。

中段の中央に描かれた3人の人物は両研究者とも竈神と記している。フィン・ディン・ケットは、とくに竈神の髪型、表情、服装に注目している。ベトナム人や中国人は髪を丸めていないこと、服装や表情もベトナムとは異なるため、17世紀のフエ地域で行なわれた交易によりタインハー港に訪れた外国人の姿が影響していると考えている¹³。

竈神の左右に描かれたモチーフと配置について2人の解説は違いがみられる。グエン・ヒュウ・トンは区切られた空間の配置には思想や観念的な意味があるという。左右の配置が「男右女左（nam tả nữ hữu）」として、「天円地方」と陰-陽・女-男・四角-丸を組合せて描いているとすると、この版画は陰陽思想や「天円地方」の宇宙観について知識のあるひとによって描かれた版画となる。この部分については第4節で阮王朝との関係から考えてみたい。フィン・ディン・ケットは版画のなかに陰陽や「天円地方」が描かれるという考えには同意していない。

次に、竈神の左右に描かれた各モチーフについてみると、フィン・ディン・ケットは、農民の生活に密接した食や調理に関するものとして捉えている。それについて、シン村の農民により製作された版画には、17世紀当時の人々が台所空間に望むもの・豊かさの象徴となるものが描かれていると考えたと述べている¹⁴。一方でグエン・ヒュウ・トンは生活道具であるとしている。その理由について、版画に描かれているものは昔からある基本的なものであり、竈神三柱が使用するものまたは神への供物であると述べている¹⁵。農民が実際に使用するものと竈神への供物という点で相違がある。

下段に描かれたモチーフの解説はほぼ共通している。男女の従者と動物、盆に盛られた果物とおこわの違いはあるが、農業の成果としてみれば共通している。しかし、動物には家畜以外の象なども描かれているが、その理由については両者とも述べていない。

2人の研究者によるモチーフの解説は細かい部分の相違は多い。空間区分や中段の左右のモチーフが農民の身近な生活に関連するものであるか竈神への供物であることを明らかにすることはここでは難しい。しかし、版画全体としてみれば両研究者が豊かさや発展、希望として捉えていることは共通している。

（3）現在製作されている竈神版画のモチーフの比較

研究者の解説をもとに、現在フエ地域で使用されている上記の3種類の竈神版画をもう少し比較してみたい（図 5-5）。

全体をみると、①と②の版画のモチーフは共通しているが、③はガスボンベが描かれている以外にもモチーフの数の違いや描き方に大きな違いがみられる。ガスボンベの版画は、前述したように1990年代以降に製作されたと推定される。「迷信異端」が禁止され村の多くの人々

¹³ 2013年フィン・ディン・ケット氏のご教示による。

¹⁴ 2013年フィン・ディン・ケット氏のご教示による。

¹⁵ 2013年グエン・ヒュウ・トン氏のご教示による。

が版画業をやめ、版木製作ができる人がいなくなったことで、村のなかでわずかに版画業を続けていた人たちが版木製作をトーチャムに依頼したと考えられる。この版画はガスボンベが描かれているだけでなく、版木を使用する製作者の意識をはじめ竈神崇拝に関していくつかの問題を含んでいると考えられるため、追加調査をして別の機会にとりあげて考えていきたい。ここではいくつかの項目にわけて版画のモチーフをみていく。

・空間区分

①②の版画には、直線が引かれており明らかに空間が区分されている。水平の線と、中段に




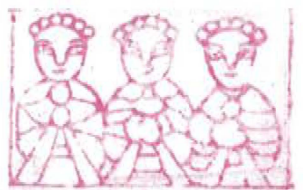


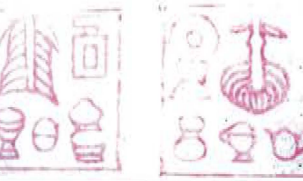
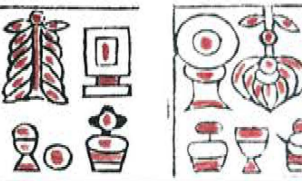
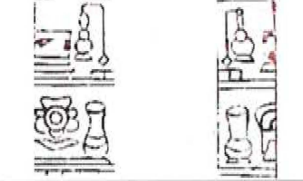
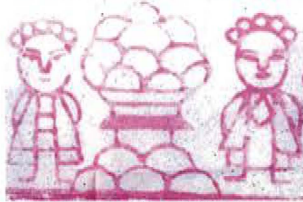


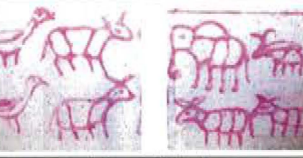
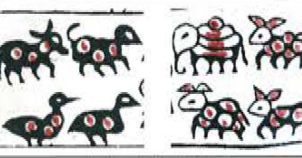
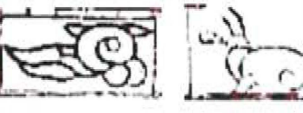
	①竈神版画 (最も多く流通)	②竈神版画 (フック氏所有)	③竈神版画 (ガスコンロ)
上部 屋根			
	瓦屋根 屋根の中央上:宝珠 左右対称:二つの丸と四角	瓦屋根 屋根の中央上:宝珠 左右対称:二つの丸(花)と四角建物	瓦屋根 屋根の中央上:宝珠 左右対称:二つのもの
中段 中央 三柱			
	三柱 丸めた髪 顔の描き方:目と鼻に特徴	三柱 丸めた髪 頭に被り物? 顔の描き方:目	三柱 冠? 左右の柱 三神の下:壇 顔の描き方:口元に特徴 笑顔
竈神 モチーフの 左右			
	左右 各5品 上2品(大)、下3品(小)	左右 各5品 上2品(大)、下3品(小)	左右 各4品 棚に置かれた品物 上2品 下2品
下段 中央			
	2人 左右の服 四角とひし形 果物(おこわ?) 器のなか11個 下5個	2人 左右の服 四角と楕円 果物(おこわ?) 器のなか14個 下5個	ガスボンベ 2本
下段 動物 両側			
	左右 4匹(頭)ずつ 左:二足(左)、四つ足(右) 右:四つ足	左右 4匹(頭)ずつ 左:二足(下)、四つ足(上) 右:四つ足	左右 1匹ずつ 左:不明(花?) 右:動物?

図 5-5 シン村の 3 種類の竈神版画

は中央の三柱の左右に垂直に線が引かれている。①の版画は水平に 2 本の線が引かれ上段・中段・下段の区分がされているようにみえる。③の版画では空間区分に違いがみられる。竈神は中央に置かれているが、左右の供物は四つに区分されているようにみえる。また直線による区

分はない。

・瓦屋根

三つの版面に描かれている。屋根の中央に宝珠も描かれているが、かたちは三つとも異なっている。①②のモチーフには屋根の両側対称に、円形と四角の建物が描かれている。②の円形はグエン・ヒュウ・トンが記したように花に見える。瓦葺きの屋根を描くことが一つの要点になっていると考えられる。

・竈神三神

中央に三神が描かれていることは共通している。①と②は丸めた髪が描かれている。しかし、②は額の上に先が引かれ頭の左右からリボンのようなものがみえるため、鉢巻きまたは被りものをしているようにみえる。服装は①②ともほぼ同じである。③は冠と服装に違いがみられる。また台座と竈神三神の両側に対の柱が描かれている。

・表情

グエン・ヒュウ・トンは温和な表情と記しているが、3種類の版面に描かれた竈神の表情は異なる。①と③は目元が少し似ているが、②の表情はシンプルである。特に目の描き方に違いがみられる。②③には笑顔がみえる。下の従者2人は②は微笑んでいるようにみえるが、①には笑顔はない。

・供物

①と②は同じ数の供物が描かれている。供物の描き方に細かい部分の違いがみられるが、形は類似しているためおそらく同じものであると思われる。形は、左右の上部に描かれた二つずつの供物は四角いものと丸いもので区分がされている。下の小さな三つずつの供物は、かたちの区分はみられない。③は数も描かれているものも異なっている。

・動物

①②の版面には、下段の左右に動物が描かれている。描き方の違いは多少みられるが、共通した種類の動物を描いているようにみえる。①と②の違いとして、①は二足の動物が上下に描かれ、②は下段に2匹並んで描かれている。すべての動物を特定できないが、象などの家畜以外の動物も描かれていることがわかる。

・数

2人の研究者は数については記していない。版面に描かれたモチーフの数をみていきたい。上段は、①②③とも瓦屋根の脇に左右対称に①②は二つずつ、③一つずつ描かれている。中段の中央は竈神三柱が描かれている。丸めた髪の数に違いがある。①は6個ずつであるのに対し、②は5個ずつである。しかし、①とほぼ同じモチーフの版木に頭部の丸めた髪の数も5個のものもみられる(図3)。三柱の左右のモチーフは、①②それぞれ上2個下3個の5個ずつ描かれている。下段は、①②には中央には従者2人、2人のあいだに山盛りの果物(おこわ)が描かれている。①は器のなかに11個、下に5個、②は器のなかに14個、下に5個置かれてい

る。竈神の昔話には従者が登場する話があるが1人しか登場しない。従者2人は昔話とは関係なく版画に描かれたものだろうか。両側の動物はそれぞれ4匹(頭)ずつ描かれている。

モチーフの数をみてきたが、ベトナム人の数の概念について大西は、日常生活において奇数3は忌まれ、偶数4が安心感のある数として好まれるが、3という奇数は、信仰生活では常に用いられている。3を吉数とするのは中国の影響でありベトナムの民間信仰のなかで18世紀頃に神の数が3から4に変化すると述べている(大西2009:14-16, 2017:179-184)。竈神版画のなかで3という数をみると、竈神三柱のみである。

ここでは、偶数と奇数の関係からみてみたい。上段は一つの屋根瓦と左右の円形と四角のモチーフ、奇数と偶数が混合している。中段には竈神三柱と左右に五つずつの奇数のモチーフが描かれている。下段には2人の従者、果物は上下2ヶ所、左右それぞれの4匹(頭)の動物、偶数で描かれている。ここから、中段は神の空間であり奇数のモチーフ、下段は人々の生活空間として偶数のモチーフと考えることはできるだろうか。竈神の丸めた髪の数や竈神三柱の左右のモチーフを上部2、下部3に区分していること、果物(おこわ)の数などはどのようにみることができるだろうか。

以上、現在シン村で製作されている版本について述べ、研究者によるモチーフの解説を整理し、それをもとに現在のシン村版画で使用されている3種類の版本のモチーフを比較した。つぎにそれぞれのモチーフについて製作者がどのように考えているのかを述べていく。

(4) 版画製作者によるモチーフ解説

フォック氏は、竈神版画に描かれているモチーフは版画業開始から変わらないというが、現時点でシン村版画の起源も定かではなく古い竈神の版本や資料もないため、モチーフの変化に関しては未詳である。ここでは、現在も版画業に関わっている人々がモチーフにどのような認識を持っているかを述べていきたい。

①キー・ヒュウ・フォック氏

竈神版画のモチーフは版画を作り始めたときから同じであるという。その理由は、版木を作るために版画は必ず1枚保管し、版木にその版画を貼り彫っていくため、モチーフは昔から同じであるという。

モチーフの配置は、「男左、女右」の考えで描かれる。版画のなかの竈神から外に向かって左右となる。版画は3段に分かれ、上段には、台所の屋根が描かれ、その両脇には花。花の名前は忘れたという。両側にあるのは、昔の家で飾られていたものである。中段の中央には竈神三神、左(版画の右側)は男性のもの:扇、太鼓、水を入れる瓶、グラス、酒瓶。右(版画の左側)には、女性のもの:扇、鏡、香水瓶、皿、石灰瓶。下段の中央には果物、その両脇にいる2人のうち左(版画の右側)は、動物の世話と家の掃除をする役割をもつ土公(Thổ công)、右(版画の左側)は、家を守る土地(Thổ địa)である。その両側には動物たちが描かれる(図5-6)。

まず、フォック氏が型彫りした竈神版画をみてみたい。現在市場などで最も多く売られている版画(写真2①)と較べると前述したように中央の竈神の顔や表情に違いがみられる。また瓦屋根の上の宝珠、動物、竈神の左右のモチーフも少しずつ異なっていることがわかる。しかし、フォック氏のモチーフ解説はグエン・ヒュウ・トンと重なる部分が多く、フォック氏

への聞き取りから細部の違いをあえて意識して作成した様子はないため、描かれたモチーフの細部の違いに特別な意味があるとは考えにくい。

次にフォック氏のモチーフ解説であるが、グエン・ヒュウ・トンの解説と重複しており、2人のあいだで会話がされたのではないかと思われる。細かい部分では、中段の左右のモチーフのなかで石灰瓶の配置がグエン・ヒュウ・トンと異なり、女性のものとして位置づけている。檳榔を噛む習慣は女性に多いが、石灰瓶には、オンビンヴォイ（Ông bình vôi 石灰瓶の翁）という説話があり、男性の敬称がつけられており、実際の形も丸いため、ここでは男性の生活道具と考えたほうがよさそうである。下段の2人についてフォック氏は、「土公」と「土地」と説明している。しかし、「土公」と「土地」は神であり、20世紀半ばに新たに竈神三神の役割として「土公」、「土地」、「土圪」が登場しており、昔話にも描かれるようになったことからフォック氏の説明はおそらくその昔話の影響ではないかと考える。

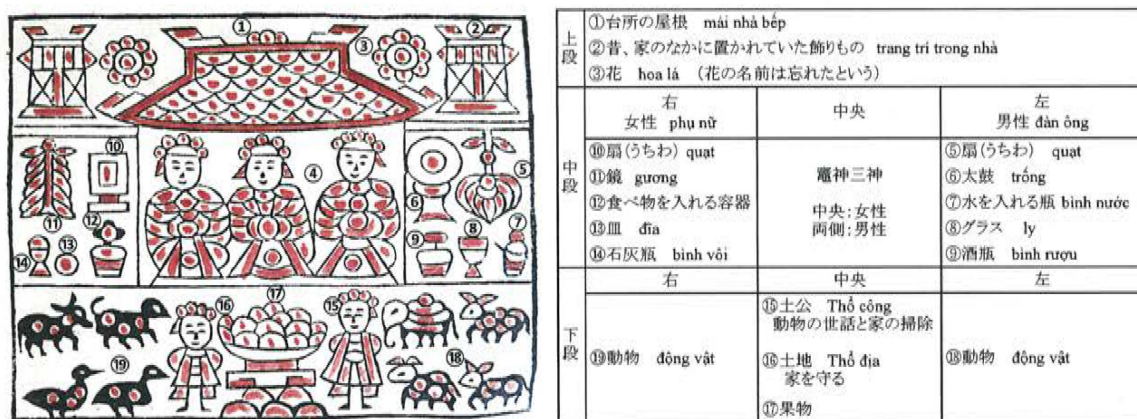


図 5-6 キー・ヒュウ・フォック氏による版画の解説

②シン村の人々

版画業に関わる人々の多くは、前述した4人の女性の息子や嫁、また版木を貸している人々である。結婚してから版画の印刷などを仕事してきた40代-50代の女性は、描かれたモチーフについてはよくわからないという。しかし、大きく商売を展開していた女性たちもまた、モチーフは変わらないと述べながらも描かれているものについては詳しくわかっていない。おそらく、描かれたモチーフには特に興味を持っていないのだろう。そのことを象徴する事例として、2014年に聞き取りをした当時73歳のレ・ティ・リエン（Lê Thị Liên）氏の話を取り上げたい。リエン氏は、両親、祖父、曾祖父が版画業をしていた。自分も結婚して18歳から版画の仕事をしており、昔は自然の植物や貝から色を作っていたと話す。リエン氏は、竈神の版画のモチーフは昔から何も変わらないという。しかし、所有している版木は写真2の③ガスボンベが描かれた版画である。解説では、花瓶、バナナ、ランプ（大小）、山羊、中央にいるのは、3人のおばあさん（本来は竈神三柱）。下段に描かれているのは2人が座るイスと答えている。そのあとでほかの人から指摘され、2人が座るイスをガスボンベといい直した。版木は、昔はトーチャムに頼んでいたという。そして、ガスボンベの版画は昔からあると思うが、間違った版画かどうかはわからないと話した。

60-70代の男性に聞き取りした話では、モチーフは変わらないが大きさが少し小さく、8割ほどになったようである。色も少し違うというが、これはおそらく天然の原料と化学染料の

色の違いであろう。興味深い解説として、下段に描かれた動物は家畜（豚や鶏など）と森の動物（象と馬）に区別されるという。また、描かれているものは家族が生活に使うもの、道具やまたは供物である。具体的なモチーフの解説はないが、何人もこのように答えている。

村の人々の話をまとめると、みんな同じようにモチーフは変わらないという。それは、自分たちがあえてアレンジを加えることなく、親たちから引き継いだものを使い続け、壊れれば当時はトーチャムに同じものを依頼していたからである。そしておそらく、何が描かれているのかをほとんどの村の人たちは意識していなかったのであろう。モチーフには、版画が作られた当時の生活や願望が反映しているはずであるが、それが製作する人々に伝承されるわけではない。シン村版画には多くの種類の儀礼版画があり、以前はさらに種類が多かったという。そして、彼らは職業として版画を生産してきたのであり、伝統的手工芸として注目され始めたのはまだ新しいことである。それでは、なぜどのようにフォック氏や両研究者はモチーフを読み解いていったのか。それを示す資料や解説などもないため未詳である。そのため、次はもう少し別の視点から、北部地域で作られた版画の比較からモチーフを読み解いてみたい。

第3節 北部地域の竈神版画との比較

(1) ドンホー版画のなかの竈神版画

北部ドンホー村のドンホー版画に描かれる竈神版画をみると、多色刷りの鮮やかな版画である（図5-7）。中央には、竈神三柱（真ん中は女性）が座っている。上部には「灶君位」と書かれ、左右には対聯があり、版画の左側は「年増富貴」、右側は不明である。竈神の前には三つの供物：飲みのも（水または酒）と魚と果物が捧げられている。供物の少し下の両端に、2人の従者が手に何かものを抱えて立っている。その下には動物：豚、牛、鶏、山羊？と、真ん中には三つの道具（ランプ（?）、竈（?）、もうひとつは不明）が描かれている。左下には杵と臼が描かれ、右下は不明である。

版画に書かれた文字からは中国の影響がみられるが、中央にはベトナムの三柱の竈神が描かれている。また、ドンホー版画には、「灶君位」以外に「土公位」の版画があり、そこには夫婦2人が描かれている。

ドンホーの竈神版画は、従者2人の間に引かれた線を境に、上段は竈神の暮らす世界、下段は人々の暮らす世界と二つの世界（空間）に分かれているようにみえる。下段の動物は家畜であり、家で使われる道具が描かれている。

ドンホー版画と較べると、シン村の竈神版画はディテールが非常にシンプルであることがわかる。モチーフをみていくと、ドンホー版画には、屋根瓦はなく竈神の左右に道具が描かれていない。下段の山積みされた果物（おこわ）もなく動物の数は半分である。一方、シン村版画には、対聯の文字や「灶君位」の漢字は書かれていない。



図5-7 ドンホー版画

(2) アンリ・オジェ編纂の竈神版画

次にアンリ・オジェ編纂の竈神版画をみていきたい(図5-8)。オジェがベトナム北部地域の人々の生活を調査し記録をしていった版画のなかに竈神を描いた版画が数点ある。そのうちのひとつである。

屋根のついた建物のなかに3人の竈神が座っている。真ん中は女性である。屋根には「灶君位」と書かれている。竈神の両側には対聯があり、版画の右に「年又増富貴(年々富貴を増し)」左に「日又壽榮華(日々榮華を壽(ことほ)ぐ)」と書かれている。建物の両側には笹が描かれている。竈神が座っている前の庭には、おそらく生活で使用すると思われる道具が置かれ、1番手前には動物：水牛、犬、鶏、豚が描かれている。

版画のモチーフとして、対聯や「灶君位」の文字や動物はドンホー版画と共通している。おおかたドンホー版画の影響を受けて描かれたものであろう。しかし、異なるのはかなり庶民的な雰囲気を出している点である。また、竈神の空間と人々の生活空間は直線などで分断されず、ひとつの空間として描かれている。しかし、見方によっては建物の中にいる竈神が人々の生活を眺めながら会話をしているようにもみえる。

シン村の竈神版画と比較すると、屋根の描き方に違いがみられる。ドンホー版画と同様に竈神の左右には道具がなく、動物の数も異なる。アンリ・オジェ編纂の版画には従者2人が描かれていない。そして、シン村の版画に生活で使用される道具が描かれていないことに気づく。



図5-8 アンリ・オジェの版画

(3) 竈神版画の比較

シン村の竈神版画の特徴について、ドンホー版画とオジェ編纂の版画と比較から若干の考察を試みながらみていきたい。

ドンホー版画とアンリ・オジェ編纂の版画の竈神は描き方に相違はあるが、二つの版画の特徴は、ドンホーの竈神版画は直線により上下が区分され、オジェ編纂の竈神版画は建物の中から外を見る構図により区分されているように、竈神のいる世界(空間)が描かれている点にある。特にオジェの版画は、建物のなかにいる竈神が人々の暮らしを眺めている様子が庭に置かれた庶民の生活道具や家畜からみえてくる。そのように版画からは竈神の物語を想像することができる。一方でシン村の竈神版画は、空間をはっきり直線で区分して中央に竈神を配し、そのまわりにさまざまなモチーフが詰め込まれている。上段には屋根と屋根瓦、両側の建物、中段には竈神とその左右に描かれた道具類、下段には2人の従者と多くの動物たちと山盛りの果物(おこわ)。このシン村の版画から竈神のいる世界の物語を想像することは難しいのではないだろうか。そこにシン村の竈神版画の特徴があらわれている。詰め込まれたモチーフに儀礼のための版画である大きな理由があると考えられる。しかし、オジェ編纂の版画に描かれた生活道具がシン村の版画には描かれていないのはどういうことだろうか。

また、もう一つ大きな違いがみられるのは、二つの版画は共通して上部に「灶君位」と記され、左右に対聯が掲げられている点である。中国の竈神の影響であり、版画の描き方にもあらわれていることが明らかにわかる。それと比較するとシン村の版画からは二つの版画に描かれるような中国的な影響はみられない。ではどのような影響がシン村の版画にはあらわれているのか、次節で考えてみたい。

第4節 シン村の竈神版画に描かれた特徴

シン村の竈神版画が儀礼版画であることを描かれたモチーフから考えてみたい。今のところモチーフを実証できる資料や根拠はなく、現在の版画製作者に伝わるモチーフに関する伝承などもないため、幾つかの方向からみていきたい。

(1) シン村の竈神版画の解説とモチーフの比較

まず、これまでの解説、2人の研究者やシン村の製作者の話を経ると、全体的に竈神版画には農民の家屋や生活に関わるものが描かれているということになる。この版画が作られた時代はいつ頃であろうか。フォック氏の家譜には8代前の先祖が海南島から来たことは記されているが、版画業を始めたという記述は見当たらない。資料からシン村の版画製作の起源はわからないが、村の人々の聞き取りのなかで4代前、また6代前から版画製作をしていることから150-200年前にシン村で版画業が行なわれていたと考えるのが妥当であろう。すなわち、この版画のモチーフが描かれたのは阮王朝の時代である。

版画に詰め込まれたモチーフが、2人の研究者の解説にあるように、豊かさや農業の成果、発展、希望であることは、人々が家庭を守る重要な神として竈神を崇拝し、家族の健康や平安を祈願することから考えても間違いのないであろう。そして時代や人々の暮らしに思いを巡らすと、フェ地域は第3章で述べたように厳しい気候条件という生活環境にあった。だからこそ守護神である一方で、災異神としても観念され、竈神に対する崇拝は強大であったと考察した。送神儀礼における竈神への供物が他地域に較べても非常に簡素なのは、厳しい生活環境の影響があるのではないだろうか。それらから考えると、下段には実際の生活における五穀豊穡と家畜の繁殖を願いとして、多くの動物や山盛りの食べ物を描いたとみることができる。

また、シン村は『烏州近録』に記録されているように、農村でありながら商業で栄えた村でもあった。上段や中段のモチーフは、人々が目にする機会があっても農村ではほとんどみられない瓦葺きの屋根や別棟、生活に関連するさまざまな道具である。商業をとおして多くのものや情報が入るなかで、実際の暮らしには用いられない豊かな品々を竈神への供物として、または自分たちの生活道具としたい願いを込めて描いたのではないだろうか。それがオジェ編纂の版画のような農業や実用品としての実際の生活の道具は描かず、その代わりに団扇や鏡などを描いていることにはあらわれている。

シン村竈神版画の特徴のひとつは、ドンホー版画やオジェ編纂の竈神版画のように竈神の世界を描くのではなく、版画全体が自分たちの豊かな暮らしと結びつく世界であり、それぞれのモチーフが願いとして描かれた儀礼版画であるといえる。

(2) フェ王宮の影響

そして、もう一つは阮王朝時代、フェに王宮が置かれていたことが大きく影響しているのではないだろうか。シン村の竈神版画が空間を直線で区分してあらわしているのは、前述したようにドンホー版画やオジェ編纂の竈神版画との大きな違いである。

グエン・ヒュウ・トンが述べたように空間区分に、「男左女右」の陰陽思想や「天円地方」の宇宙観があらわされているとすれば、それは阮王朝の影響が考えられる。フェ王宮は、南面して前と左を陽（公的・男性的・優）、後と右を陰（私的・女性的・劣）という儒教や陰陽思想の影響を受けた配置構成の観念的体系が明確にあらわれている（中川ほか 1996 : 68）。また、王宮の建物の配置だけではなく、「天円地方」の思想に基づいた建物には、阮王朝時代に建設されたナムザオ（Đàn Nam xiao）と呼ばれる南郊壇（天壇）がある。三成からなる天壇の最上壇（第一成）は円形をして天を象り、第二成の方壇は地を顕し、阮王朝の皇帝が国家の繁栄と王朝の安寧のために供儀をする場所として設けられた（綿貫ほか 2006 : 377）。そこでは、毎年春の三吉日に儀礼が行なわれていた¹⁶。版画に当てはめた場合、中段の空間は左右に区分されている。そして中段の空間のみ直線で左右に区切られ、そのなかの上の部分に描かれたものは四角と円形とに区別ができる。このことは、竈神を配置する場を王宮の空間配置に倣って描いたとみることが可能ではないか。

また、版画に描かれた動物と王宮の関わりもある。聞き取りのなかで動物は家畜（豚や鶏など）と森の動物（象と馬）に区別されるという話があった。この象と馬は、阮王朝時代に皇帝の御馬・御象として皇城内で飼われていた¹⁷。阮王朝が飼育していた動物として描いた可能性も考えられる。しかし、一方でシン村の人々は版画の原料を採りに森に入っているため、その森にいる動物とも考えられる。

第3章でも述べたように、翁寺の「灶王真経」の例から阮王朝の影響が民間に伝わっていたのは明らかである。フェ地域の民間の竈神儀礼は、宮廷での儀礼の日時に従い、いつでも人々は宮廷儀礼より控えめな標準的な儀礼を行なうことを心がけていたという¹⁸。フェ地域の人々が常に宮廷の人や祭礼を意識していたことは、人々の生活や文化が、阮王朝の影響を受けて作り上げられてきたということもできる。阮王朝の陰陽思想や宇宙観が祭礼をとおして民間の人々に伝わっていた可能性、その影響がシン村の竈神版画に描かれた可能性があるのではないだろうか。森に住む動物として描かれた馬と象が、王宮で飼育されていた動物と合致することは偶然ではないように思える。

シン村竈神版画の特徴は、空間を明確に区分し、詰め込まれたモチーフには豊かさへの憧憬と願い、現実的な五穀豊穡と家畜家禽の繁殖の願いが込められている。もうひとつの大きな特徴として、竈神版画の空間区分や配置には、阮王朝の陰陽思想や観念が影響していると考えることができる。

(3) 民俗学的視点からみたシン村の版画製作

本章では、民俗学的視点からシン村の版画製作についてみてきた。村の人たちの話を聞いていくと、1975年以前は商売に長けた4人の女性を中心となって村の版画生産が行なわれていた

¹⁶ 『大南一統志』京師。

¹⁷ 『大南一統志』京師、官署。

¹⁸ 2013年チャン・ダイ・ヴィン氏のご教示による。

ことがわかってきた。彼女たちは、家族が多ければ家族内で作業していたし、子どもが少なかった女性は村の人を雇っていたし、それぞれの家族状況によって異なっていた。4人の女性が活躍していた頃は、農業の閑散期に行なっていたが、組織化された相互扶助的な結びつきのもとで版画が製作していたわけではなかった。そして、彼女たちや周りも人たちは、シン村の版画が伝統的な手工業として注目されるようになったことには特に関心を持たず、一つの商売として昔も今もシン村で儀礼版画を生産してきた。そして、陰暦1月9日の村の職業神への儀礼は欠かすことなく、迷信・異端が禁じられていた間も4人だけが夜中に隠れて亭を訪れ拝礼していた。現在でもキー氏とセン氏は少なくなったが版画業を続け、職業神への拝礼も毎年行っている。村の人たちの家にある版木は、ほとんどが彼女たちやその家族が所有する版木であり、その版木を借りて版画作りを仕事として続けている。

迷信・異端の禁止によって、シン村の版画生産は衰退する。そして、1990年代に入りフェ地域の伝統工芸品に関心が向けられるようになると、シン村版画も注目されるようになる。現在、シン村の伝統的手工芸として版画の継承と発展を担っているのは、キー・ヒェウ・フォック氏である。フォック氏は、版画の伝統を正しく継承していくことと同時に新たな作品を作り出し、発展させていくことも大事にしている。そのことは非常に重要なことである。しかし、これまでの研究は伝統的手工業という面に注目してきたため、村の人たちの一つの仕事としての版画生産の実態には関心が向けられてこなかった。

本章では、民俗学的視点からシン村の版画業をみていくことで、村では4人の女性を中心に商売としての版画業が展開され、それに関わる村の人たちの実態を少しではあるが明らかにすることができた。



写真 5-4 版画業の始祖への儀礼参拝に来た2人
ファン・ティ・キー氏 (左)
チャン・ティ・セン氏 (右)

以下は、第2節シン村版画の歴史と伝統的版画業、(3) 伝統的版画業と職業始祖への祭礼のなかのシン村の伝統的版画業 (122 頁) に関する図表である。

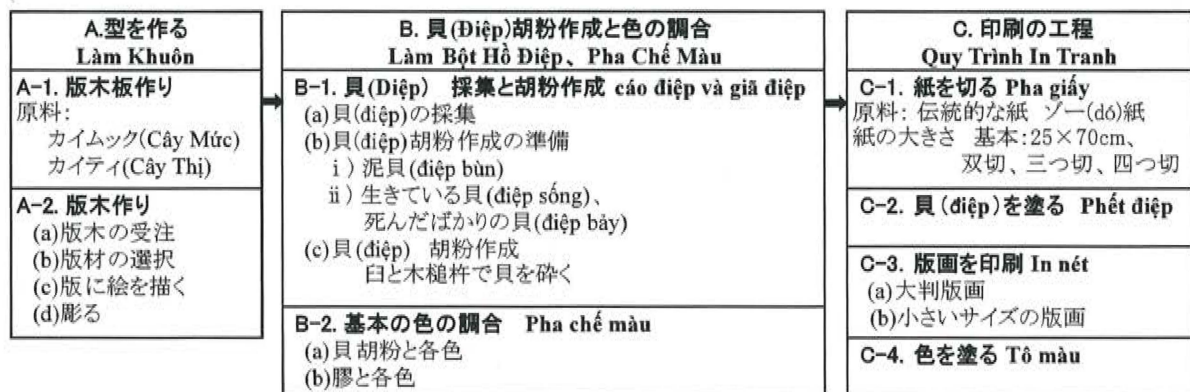


図 5-2 版画製作の工程 出典: Huỳnh Đình Kết 2001: 78-83 を基に筆者作成

表 5-1 版画の色の原料

色の原料	<p>① Bàng (バン) 和名:モモタマナ(沖縄クワディーサー) 学名: Terminalia catappa L</p>  <p>解説 木の高さ:25m以上 木の枝:広い傘状の円形を作る 葉:大きな匙の形、頭部は円く、葉の上面は滑らか、葉の下面は薄褐色の毛がある 単葉:長さ20-30cm, 幅10-13cm 花:多い 大きさ10-13cm 果実:卵形、平たく滑らか 長さ4cm,幅3cm,厚み15mm種:白色 核がある 油を多く含む 果実の時期:8月-10月 マルク諸島(インドネシア)からベトナムに移入</p>
	<p>② Bông Ngọt (ボンゴット) 別名rau Ngót(ザウゴット) 和名:トウダイグサ科アマメシバ、別名トウゴマ 学名: Sauropus androgynus (L) Mers</p>  <p>解説 木の高さ:約2m 木は小さく、真っ直ぐに伸びる 木の枝:真っ直ぐにのびる 幹の皮:緑、老木になると薄褐色 葉:不揃い 長さ4-6cm,幅15-30mm 茎:非常に短い 小さな2葉 果実:球形 種:小さい縞がある</p>
	<p>③ Cây Dung (Đưng) (カイズン[木]) 和名:ハイノキ科ハイノキ属 学名: Symplocos racemosa Ronle</p>  <p>解説 木の高さ:約2m 切断しなければ5-8mくらい。葉:不揃い 単形、短い茎、長く先の細い卵形、葉の縁は鋸歯、葉上面は滑らか 乾期は葉の色が黄緑、黄茶色 花:多い 白色、薄黄緑色 果実:核は食べられる 長く先の細くなった形 長さ6-10mm, 果肉:赤紫 種:単独、茶色(褐色) 皮:柔らかく、細い。薄黄茶色 どこを切っても皮は赤色 北部各省の一般的な木 フェエでは、森のあたり低丘陵にある 葉にタンニン、フラボノイド、樹皮に赤色色素と3つのアルカロイド (loturin, coloturin, loturidin)がある</p> <p>グエン・ヒュウ・トンによると、cây đưngは通常、古い森林区に生息し採集は困難で植物採集にいくグループは採集に長くかかるという。また、採集のときには、葉を取り、枝を折り持ち帰る。cây đưngは家を作る木材であり、薪、炭にも使用していた。</p>
	<p>④ Cây Dành dành (カイザインザイン[木]) 和名:クチナシ 学名: Gardenia Jasminoides Ellis</p>  <p>解説 多くの野原で栽培 高さ:約1-2m 常緑性低木 幹:まっすぐで滑らか 葉:球状形、葉上面は深緑色 花:単独 花びらは白色で茎はない 香りが良い 開花:夏 果実:お椀形、6-9角 2-5の区切り 熟すと赤黄色になる 種:非常に多く香りがよく苦味がある Dành dànhには黄色のグルコシド、タンニン、植物油、ペクチンを含む。 αクロセチンは黄色染料である。</p>
	<p>⑤ Cây Dong (カイゾン[木]) 和名:? 学名: phynium Parviflorum Roxb</p>  <p>解説 民間ではlá Dung (ラー・ズン) (ズンの葉)と呼ばれる。黄色に染めるために使用される。 野生のlá Dungは湿った場所、森、山一帯に生息。栽培しやすい。草木の高さ:約1m 葉:大きく形は長い。先が細く鋭くなった卵型、葉の表面は滑らか。葉の長さ35cm,幅12cm, 頭状花序、花弁は白色と赤色、果実は卵形、種は細長い インドやインドネシア、中国で見られる。</p>
	<p>⑥ Cây Gai (カイガイ[木]) 別名Trừ ma (チュマ) 和名:イラクサ科カラムシ(チヨマ苧麻) 学名: Bochneria nivea(L) Gand</p>  <p>解説 木の高さ:1.5-2m 葉:大きく不揃い、心臟の形 長さ7-15cm, 幅4-8cm 葉の縁は鋸歯があり、葉の下面は白色で白い毛が大量にある。葉の上面は濃緑色でざらざら 花:単独、独特な性質をもつ。自然木で、植栽しやすい。 この葉はバイン ガイ(bánh gai) (タインホア省) バイン・イッ・デン(bánh ít đen) (フェエ省)というお菓子を作るのに使われる。</p>
	<p>⑦ Hoa Hòe (カイホエ[花]) 和名:マメ科エンジュ 学名: sophora Japonica L</p>  <p>解説 木の高さは5-6m、葉は羽状複葉で不揃い、7-17対の小葉がある。花:蝶型花、白色 種:各種の間がくびれており、連珠状になっている。 花の有効成分はルチンを6-30%含む、クエルセチン、グルコース、ラムノースも含む。 果実にもルチンは含まれる。</p>
	<p>⑧ Mối (モイ) 和名:? (中国語名: 美洲錫生藤) 学名: Cissampelos pareira L</p>  <p>解説 蔓科のひとつ 幹と枝は少なく、繊細な柔らかい毛がある 葉は心臟のかたちをしている。葉の縁は常に柔らかい 長さ2-5cm, 幅3-6cm, 両面に繊細で柔らかい毛がある 葉は粘性をもつ 果実の核は馬の蹄の形</p>

色の原料	<p>⑨ Mông Tơi (モントイ) 和名:蔓科ツルムラサキ科 学名: <i>Basella rubra</i> L.</p> <p>解説 野生と家の庭でも栽培される。一年または、二年草。幹は1.5-2mの長さで巻く。枝は薄緑または、薄紫色。葉は卵形で長さ3-12cm、幅2-6cm・不揃い、単独、肉付きがよく茎がある。花は綿花形、白色または薄赤紫 果実は球形または卵形、長さ約5-6mm、小さく、水分が多い。熟すと黒紫色になる。ビタミンA3、B3、サポニン、膠質、鉄分を含む。葉は熱を冷ますためのスープを作るのに使う。また各種のドライフルーツやジャムを赤く染めるために使用、スープに加えると色が濃くなる。</p> 
	<p>⑩ Trâm (チャム) 和名:カユブチ樹 学名: <i>Melaceuca Jeucadendron</i> L.</p> <p>解説 ベトナム一帯に生息。木の高さは5m、幹は細く乾燥した樹皮は剥離する。葉は不揃いで長さ4-8cm 幅10-20mm。茎は三日月刀形で薄黄緑色。花は小さな金色の花。果実は円形、直径13mm、袋はとても堅く、3つに区切られている。種は大きさ約1cm、卵形。カンボジア、フィリピン、マレーシアにも生息。葉は蒸留して精油をとり、感冒を治す作用がある。</p> 
	<p>⑪ Trâm (チャム) 和名:蘇芳すおう 学名: <i>Caesalpinia Sappan</i> L.</p> <p>解説 野生の木、各地で栽培もされている。木の高さは約10m、幹に棘がある。葉は羽状複葉、12対、または12対以上、表面は滑らかで裏面は毛がある。花は金色、瓜花形で灰色の毛が覆う、5花弁。実は逆卵形、厚く棘があり堅い。長さ7-10cm、幅3.5-4cm。種は褐色、実のなかに3、4個の種がある。お産のときの感冒治療や赤痢のときの感冒治療に用いられる。タンニン、没食子酸、ブラシリン、植物油等を含む。ブラシリンの性質の1つに黄色の結晶がある。ブラシリンと水酸化ナトリウムで赤色ができる。染色する。</p> 
	<p>⑫ Cây Dương Liễu (カイ ズオン リュウ [木]) 和名:モクマオウ科(木麻黄) 学名: <i>casarina</i></p> <p>解説 常緑高木、樹冠は円錐形をなす。枝は淡緑色で細く、小枝は特に繊細。葉は退化。樹皮は灰褐色で繊維状にはげ、条紋がある。種子は偏平で灰褐色を呈し光沢がある。用途: 建築材、土木用材、燃料材、樹皮は染料木は海岸防風林。(解説 出典: 独立行政法人 森林総合研究所九州支所 http://www.ffpri.affrc.go.jp/kys/)</p> 
版画版の原料	<p>① Cây Múc (カイクック [木]) 和名:キョウテクトウ科 クタジャ 学名: <i>Holarrhena antidysenterica</i> wall</p> <p>解説 自然木、フエ地域の地形・土壌に適応し、栽培しやすい。木の高さは約10m。滑らかな若い枝を有し、赤褐色の毛がある。樹皮は白い。葉は楕円、頭部は鈍角、長さ12-15cm 幅4-8cm。花は白い花をつける。果実は大きく苔色、縞がある。少し縦長の弓状、長さ15-30cm、幅5-7mm。種は長さ10-20mm、幅2-2.5mm、厚さ1-1.5mm、赤褐色、円底形。生息地はベトナム各地、インド、ミャンマー、タイ、マレーシアなど。版画版に用いるときの特徵: 木は白色、繊維は繊細できめ細かい。樹脂が多い。乾燥時も白色を保つ。木食い虫を防ぐ。軽く柔らかい。非常に割れにくい。字を彫る、版画を彫るのにも良い。木面は大きくない。平均30-40cmであり、大型サイズには対応できない。</p> 
	<p>② Cây Thi (カイ ティ [木]) 和名:カキノキ科カバイロクロガキ 学名: <i>Diosphyros decandra</i> Lour</p> <p>解説 自然木、各地域で栽培もされている。木の高さは10m。葉は不揃い、単葉、先の細くなった卵型、長さ5-8cm、幅2-4cm。新芽は堅く、毛で覆われている厚み6-9mm。花は白色。果実は丸く少し平ら、直径3-5cm、6-8の仕切がある。熟すと金色になる。種は堅く平たい。厚さ約3cm、香りがある。版画版に用いるときの特徵: 木材は白色、繊維は繊細できめ細かく、堅い。白アリ、木食い虫を防ぐ。軽く柔らかく、割れにくい材質。版画や印鑑に使用される。木面が大きく、版画に便利。</p> 
紙の原料	<p>Dó (ゾー) 漢名:鼠皮樹 和名:ジンチョウゲ科 学名: <i>Rhamnoneuron balansae</i> Gilg (Duake),</p> <p>解説 フエ地域における製紙手工芸は莫期16世紀中頃に始まった。理由は、封建莫朝に学問・試験を奨励したことにより、紙の使用が増大し、タンロンから紙の運搬が困難になり自分たちの地域で生産するようになったためである。フエ地域の製紙業は Lương Có (Đan Điền 県)、Thanh Lam (Tư Vinh 思榮 県) など各村で製紙業がおこなわれていた。17世紀までに製紙業は発達し、Đốc (Phù Vang 県)、Vinh Xương (Hương Trà 香茶 県) で紙を生産し、地域の需要に務めた。19世紀初頭まで製紙手工芸職人は、京城(都)の中に移り住み、紙を生産、その後村に帰ってきた。キー・ヒュウ・フック氏によるとシン村では紙は作られていなかったため、外から購入していたという。(漢名、和名: 榎永真佐夫 2010:11) (図 出典: 中国植物志 http://frps.eflora.cn/frps/Rhamnoneuron)</p> 
	<p>Điệp (ジエップ [貝]) 和名:マドガイ 学名: <i>placuna placenta</i></p> <p>解説 軟体動物のひとつ、2枚貝。沼、潟、河口付近、水底の泥のなかに生息。死んで長い貝: ĐIỆP bùn (泥)、死んだ直後の貝 ĐIỆP hũy (壊れた貝 ĐIỆP báy) がある。殻にはカルシウムとシリコン(ケイ素)を含む。細かく砕かれた粒子は反射する可能性をもつ。採集(Cào điệp)は毎年、5月6月、場所はタムザン(Tam Giang)干潟、カウハイ(Cầu Hai)沼、ハーチュン(Hà Trung)、ランコー(Làng Cỏ)。1回の採集は5-7日間かける。(和名: 西村昌也氏のご教示による) (図 出典: 京都大学博物館 http://www.museum.kyoto-u.ac.jp/collection/Shell/Shell00001591.htm)</p> 
胡粉の原料	<p>Điệp (ジエップ [貝]) 和名:マドガイ 学名: <i>placuna placenta</i></p> <p>解説 軟体動物のひとつ、2枚貝。沼、潟、河口付近、水底の泥のなかに生息。死んで長い貝: ĐIỆP bùn (泥)、死んだ直後の貝 ĐIỆP hũy (壊れた貝 ĐIỆP báy) がある。殻にはカルシウムとシリコン(ケイ素)を含む。細かく砕かれた粒子は反射する可能性をもつ。採集(Cào điệp)は毎年、5月6月、場所はタムザン(Tam Giang)干潟、カウハイ(Cầu Hai)沼、ハーチュン(Hà Trung)、ランコー(Làng Cỏ)。1回の採集は5-7日間かける。(和名: 西村昌也氏のご教示による) (図 出典: 京都大学博物館 http://www.museum.kyoto-u.ac.jp/collection/Shell/Shell00001591.htm)</p> 

出典: Huỳnh Đình Kết 2001:64-76 を基に筆者作成

表 5-2 色と原料と調合方法

	色	原料	調合方法
1	貝白色 Màu trắng điệp	貝(diệp) 胡粉：もち米粉 (3対1)	<ul style="list-style-type: none"> ・貝胡粉ともち米粉の比率は3：1。 ・もち米粉を混ぜ貝を煮て糊を調合するのは熟練された経験が必要。 ・精製が未熟で紙が湿っていると、貝粉が剥がれやすくなる。 ・精製が過ぎると、紙が強く反り、貝粉が落ちやすくなる。 ・もち米粉を入れる理由は、もち米の糊によりゾー紙に胡粉を塗る時に、よりくっつきやすくする効果がある。 ・貝白色でゾー紙を塗ることで色を保ち、紙を堅固にする。
2	白色 Màu trắng		<ul style="list-style-type: none"> ・紙の表面を覆うのに使用することで、ゾー紙の茶色がかった色を輝く白色に変える。 ・貝胡粉を他の色と混ぜることで明るさが増し、新鮮で濃い原色は柔らい色合いになる。
3	青色 Màu xanh dương	⑨ツルムラサキの種 (Mông Tơi) ⑦エンジュの種 (Hoa Hòe)	<ul style="list-style-type: none"> ・ツルムラサキの紫色の種を細かく挽きパルプ状にする。 ・エンジュの種を炒めて、エッセンスを抽出する。 ・パルプ状のツルムラサキの種と抽出したエンジュのエッセンスを混ぜ合わせて色を取りだす。
4	黄色 Màu vàng	③ハイノキ科ハイノキ属 (Cây Dung (Đung)) の葉 ⑦エンジュの芽(花の蕾) (Hoa Hòe)	<ul style="list-style-type: none"> ・ハイノキの葉を日に干して乾燥させ、色褪せたものを使用する。 ・その葉を3日間冷たい水に浸す。 ・葉を取り出し、色が溶け出した水を煮る。そのとき、職人は火を均等に入れるように注意しなければならない。 ・次にエンジュの若い蕾を選び、日に干して乾燥させる。 ・黄色になるまでに炒めエッセンスを抽出する。 ・ハイノキの葉の水とエンジュのエッセンスを合わせてかき混ぜる。 ・エンジュの効用により、濃い黄色を長い時間保つことができる。
5	赤色 Màu đỏ	①モモタマナの葉 (濃茶) (Bàng) ①蘇芳の樹皮、木材 (Trám) ②モクマオウ科の樹皮 (Cây Dương Liễu) (新鮮な赤)	<ul style="list-style-type: none"> ・落葉の季節のモモタマナの葉と、モクマオウの樹皮を叩いたものを濃く煮詰める。 ・モモタマナの葉は濃い茶色、モクマオウは新鮮な赤色であり、2つの原料の割合に従って異なる赤色がでる。 ・昔の赤色の調合に、蘇芳の木材と樹皮を細かく裂き、濃く煮詰めて色を取る方法があった。 ・モモタマナと蘇芳から抽出した赤色より、淡く優しい色になる。
6	赤レンガ色 Màu đơn	・レンガの粉 ・水牛の膠	・レンガの粉(焼いたレンガを磨いて粉を落としたもの)に水牛の膠を混ぜて煮詰める。
7	緑色 Màu lục	②アマメシバの葉 (Bông Ngọt) ③モイ(Mói)の葉	・アマメシバの葉と、モイの葉から色をとり合わせる。
8	紫色 Màu tím	⑨ツルムラサキの種 (Mông Tơi) ・ミョウバン	<ul style="list-style-type: none"> ・ツルムラサキの種を小さく砕き、圧縮して水を取る。 ・ミョウバンを入れて色を保ちやすくする。
9	インディコブルー Màu xanh chàm	⑩カユプテ樹の葉 (Trám)	<ul style="list-style-type: none"> ・カユプテの葉を取り、石灰水に浸して粉々に分解する。 ・その後、泡立つまで叩いてほぐす。 ・水中から泡を取りだして入念に濾過し、水を加えて凝縮されるまで煮詰める。
10	灰色 Màu xám	⑥カラムシの葉 (Cây Gai)	<ul style="list-style-type: none"> ・カラムシの葉を日に干して乾燥させて使用する。 ・小さく砕くと濃い色の水ができる。
11	黒色 Màu đen	①モモタマナの葉 (Bàng) ・灰(稲の根)	<ul style="list-style-type: none"> ・稲(粳)の根を3日間温かい状態で覆い灰にする。 ・灰と細かく砕いたモモタマナの葉を細かく擦る。

出典： Nguyễn Hữu Thông 1994:158-159, Huỳnh Đình Kết 2001 : 79-81 をもとに筆者作成

第6章 東アジアとの比較研究 竈神の昔話を中心に

ベトナムの竈神の由来は昔話で語られている。その昔話には、日本の「炭焼き長者」再婚型との類似がみられる。伊藤清司による指摘はされたものの、これまでベトナムの竈神を具体的に取り上げて東アジアのなかで位置付ける研究は行なわれていない。ここでは竈神の由来を語る昔話を中心に比較研究を行ない、東アジアにおけるベトナムの竈神の昔話の特徴を明らかにし、そこからベトナムの竈神について論じていきたい。その際に重要となるベトナム・ムオン族の竈神の昔話も取り上げていく。

第1節 ベトナムの竈神の昔話の歴史的変遷

ベトナム・キン族の竈神は、男神二柱・女神一柱の三柱からなる竈神が信仰されていることは述べてきた。その三柱の由来は昔話で語られ、人々に広く知られている。

ベトナムの竈神の話は、中国の竈神由来譚（丁乃通 841A、エーバーハルト 177 銀の移動）、日本の炭焼き長者・再婚型（日本昔話大成 149 AT822）との類似がみられる¹。伊藤が、説話は習俗や儀礼のなかから発生するとは限らず、外来の説話を利用し変容を生じて、適合し機能していくケースも考えられると記しているように（伊藤 1991:200）、ベトナムの場合は中国の話が母胎となり語られてきたと考えられる。しかし、中国の竈神由来譚には三柱の竈神は祀られない。中国から移入された竈神の話は、ベトナムで三柱の神として変容し土着化していったのであろうか。三柱として祀られるベトナムの竈神の信仰と昔話の独自性に注目したい。

本節では昔話の比較研究を行なう前段階として、ベトナムの竈神の昔話をいくつか紹介する。これまでベトナムでは竈神の昔話の整理・分析はほとんど行なわれていない²。そのため、まず20世紀の昔話研究で収集された話や竈神に関する資料に載せられた昔話を整理し、これまでベトナムで取り上げられてこなかった17-18世紀の資料に収められた竈神の話と合わせて時間的な変遷を整理する。

（1）20世紀の昔話

ベトナムでは20世紀に入ると竈神に関する研究が行なわれるようになる。昔話の収集や研究も多くはないが行なわれている。竈神に関する資料の多くは、竈神の由来を説明するために昔話を載せている。管見の限りそれらの話は再婚譚であり、結末は共通している。まず初めにベトナム文化の研究者トアン・アインの資料に収められた昔話を紹介したい。

①トアン・アイン『古きベトナムの信仰』（Toan Anh 1997(1967)）に収められている昔話

トアン・アインは、前述したように竈神の祭壇や祀り方、儀礼などについて詳細に記した初期の研究者であり、その後の研究者に大きな影響を与えている。しかし、参照した資料や調査地などの明記がないため地域や時代の特定できず、竈神の昔話も出典は記載されていない。

¹ そのほかに『大和物語』第一四八段、『神道集』とも類似する。

² ベトナムの竈神の昔話を研究しているのは、主に下記の2人である。グエン・ドン・チーはベトナムの昔話の研究者であり、竈神の昔話を収集・整理し若干の解説を載せている（Nguyễn Đông Chi 1974 (1957)）。フランス人ロルフ・スタンは、中国・苗族・ベトナムの昔話を比較し、構造の分析を試みている（Stein, R.A 1970）。

事例1 竈王の話

チョン・カオと ティ・ニーの夫婦には子供がいなかった。夫婦喧嘩になり夫に叩かれた妻は家を出て、その後若いファム・ラーンに出会い結婚した。

チョン・カオは妻を追い出したことを後悔し、妻を探すうちに乞食になった。ある日、物乞いに行った家で妻に再会した。2人は愛情を確認しあったが、妻は後夫に見つかるのを恐れ、チョン・カオを藁の山に隠した。何も知らない後夫は畑の肥料、灰を作るために藁に火をつけた。チョン・カオは死んだ。妻は前夫の死を悲しみ飛び込んだ。妻の死を見た後夫は悲しみ、自分も飛び込んだ。

3人の死に同情した玉皇上帝は竈神とした。そして3人に役割を与えた。チョン・カオは家を守る土地（トーディア）、新夫 ファム・ラーンは台所を守る土公（トーコン）、妻 ティ・ニは市場で売り買いする女性を見守る土圻（トーキー）になった。

(Toan Anh 1997(1967):116-117)

この話の登場人物は3人、夫婦と妻の再婚相手であり、それぞれ名前がある。話の内容は、①子供がない夫婦は離婚し妻が家を出る。②妻は再婚し、前夫は乞食になる。③再婚先の妻の家に物乞いになった前夫が現れる。妻は前夫をもてなし、そのあとで藁山に隠す。④後夫は何も知らずに藁の山に火をつけ、前夫は焼け死ぬ。妻は前夫を追い藁の山に飛び込む。後夫も妻の後を追って飛び込む。3人は同じ燃える藁の山で死ぬ。⑤死後3人は竈神となり、土公、土地、土圻の役割を与えられる。

基本的なベトナムの竈神の昔話の構成と共通する。この話の特徴は、3人の神にそれぞれ役割が与えられている点である。

②グエン・ドン・チーが収集した昔話

トアン・アインとほぼ同時期のベトナムの昔話研究者グエン・ドン・チーは、『ベトナム昔話の宝庫』に4話の竈神の昔話を載せている (Nguyễn Đông Chi 1974 (1957):219-227)。最初の話は「ダウザウ翁の昔話」とタイトルが付けられ、そのほかに異同の比較として3話収められている。以下に4話の簡単な説明と、そのなかの一つを事例2として紹介する。

A) 「ダウザウ翁の昔話」 『フランス・アジア雑誌』1952年に掲載。

このダウザウとは、第1章で説明しているように煮炊きのときに鍋を乗せるための三つの土製支脚を指す、主にベトナム北部地域で使われる言葉である。

登場人物は3人、名前はない。貧しいが幸せな夫婦は離婚をする。離婚の原因は凶作のため出稼ぎに出た夫が帰らなかったこと。妻は雇われていた家の主人と再婚をする。妻の再婚後に前夫が戻ってくる。前夫は悲しみから自殺をする。妻も後夫もそれに続いて自殺をする。閻魔大王は3人の愛情に感動し、土製支脚の神にした。その理由は永遠に離れず、台所の火で3人の愛を温め続けることができるからである。

B) 「竈神」 グエン・ドン・チー1956年『ベトナム神話略考』に掲載 (Nguyễn Đông Chi 1956: 117-120)。

登場人物はチョン・カオ、ティ・ニー、ファム・ラーンと名前があり、内容はトアン・アイ

ンの事例1とほぼ同じである。異なるのは、最後に三人のそれぞれの役割「土公、土地、土圪」が記されていない点である。

C) 「山西人の話」 出典の記載はない。

おそらく山西省（現ハノイ市西部）で語られていた話を採集したのであろう。この話には4人目の人物が登場する。以下に事例2として紹介する。

D) 題名なし 1948年「翁灶節」『ベトナム民』³に掲載。

ここでは、ハンセン病になった夫が妻に迷惑をかけたくないために無理やり理由をつけて妻を追い出す。その後、自分は乞食になり、再婚した妻の家とは知らずに物乞いに行く。妻に気づいた前夫は火の中に飛び込む。助けようとした妻、妻を助けようとした後夫も同じ火の中に飛び込み、竈の神となった。

他の話と異なる点は、妻が再婚した相手は最初の結婚のときに自分の家に物乞いに来た乞食であることである。しかし再婚後は、物乞いになった前夫にお金と米を渡そうとしていることから、ある程度余裕をもった生活ができていたと思われる。また、前夫の病気が離婚の理由になっていることや妻に気づいた夫が恥じて自分から火の中に飛び込むなども異なる点であるが、最終的に3人が同じ場所で亡くなり竈神となっている。

事例2 「山西人の話」

貧しい夫婦がいた。夫は線香を売る仕事、妻は畑仕事をしていた。夫は仕事で常に妻と離れて暮らしていた。ある日、夫は仕事に行き連絡もなく10年が過ぎた。待ち続けた妻は農業と狩猟を仕事にする男と再婚した。その家にはロック（Lóc）という従者がいた。

夫が従者と狩猟に出かけている間に、突然前夫が現れた。妻はお酒と食事をご馳走したが、噂が広まるのを恐れ、藁の山に匿った。夫が帰り、妻は買い物に行き、従者は獲った犬を焼くために藁に火をつけた。前夫は死んだ。妻は罪の意識からその火に飛び込んだ。後夫もそれを見て火に飛び込んだ。従者は自分のせいで人が死んだと思い、藁の山の火の中に飛び込んだ。

その後、3人は閻魔大王により三つの土製支脚となり、従者は粃殻を上から抑えるために使うレンガとなった。人々はそれをロック（Lóc）と呼ぶ。竈神の版画を描くときは、必ず三柱の隣に従者を立たせることを忘れない。（Nguyễn Đông Chi 1974 (1957):224-225）

4人目の人物である侍従ロックについて注釈がある。昔の農村にはマッチがまだなく、いつも午後になると炉（竈）のそばに置かれた粃殻を一つかみ焼べなければならなかった。朝まで粃殻の火種を残すために、分銅型に捏ねた土の塊を粃殻の上に置いて押さえていた（Nguyễn Đông Chi 1974 (1957): 225）。このロックの存在について、フィン・ゴック・チャンは、種火を保ち、燃え広がる炎を制御する役目も持つことから、火を自在に操りコントロールすることができるものの象徴であり、火の危険な部分を有用なイメージへと変化させるとその重要性を指摘している（Huỳnh Ngọc Trảng, Nguyễn Đại Phúc 2013: 40-41）。

³ H.V.V が当時の台所の様子や竈神の祀り方とともに昔話についても記したものである。（H.V.V 1948 :37-38）

③ロルフ・スタンが収集した昔話

フランスの東洋学者であるロルフ・スタンは「中国世界における竈の伝説」の中で多くの竈神の昔話を収集し、中国・苗族とベトナムとの比較・分析を試みている (Stein, R.A 1970 : 1280 - 1305)⁴。ベトナムの竈神の昔話を中国や苗族と比較したはじめての研究である。このなかでベトナムの竈神の昔話は9話取り上げられている。V1～V9と番号が付けられた昔話には、フランスで出版されたものやグエン・ドン・チーが収集した話の他に自身の聞き取り、ベトナム文化の研究者ファン・ケー・ビンの資料からの引用などがある。

伊藤は「ベトナムの炭焼の話」のなかで、スタンが収集した竈神の話は内容に大きな違いはないと述べている (伊藤 1999 : 6-11)。その大差がない理由は、ベトナムでは昔話が語られるのと並行して、三柱の竈神が信仰され続けてきたことが関係すると思われる。大差がないことも重要であるが、しかし差異に注目するとみえてくるものもある。

ここでも4人が登場する話に注目したい。4番目の人物が登場する話は9話中に2話ある。一つはグエン・ドン・チーの「山西人の話」(事例2)、もう一つはV1と番号が付けられたE.Diguet, *Les Annamites* からの引用の話であり、以下に事例3として紹介する。

事例3 (題名なし)

長い不毛な結婚生活の後、チョン・カオと彼の妻ティ・ニーは口論し合うようになった。ある日、夫に叩かれた妻ティ・ニーは逃げ出し、農民であるファム・ラーンと出会い二人は夫婦になる。二人の結婚生活は幸福であった。妻と別れた前夫は次第に貧しくなり、物乞いをしなければならなくなった。ある日、ファム・ラーンの留守のとき、お腹を空かせた前夫はティ・ニーの家とは知らずに辿り着いた。彼のことを変らずに愛していたティ・ニーはチョン・カオに食べ物や飲み物をたくさん与えた。前夫は倒れるほど食べて酔っぱらった。ティ・ニーは酔った前夫を隣の畑の藁の中に隠した。夫ファム・ラーンが戻り、畑に撒く肥料のために藁に火をつけた。ティ・ニーは絶望から炎の中に身を投げた。ファム・ラーンは妻を助けるために藁の中に飛び込み、忠実な従者もそこに身を投げた。その最初の3人は炉に置かれた三つのレンガであり、4人目は熱い灰を維持するのに役立つレンガである。

(E.Diguet, *Les Annamites*, Paris, 1906 : 50-53 (Stein, R.A. 1970: 1287))

この話は、トアン・アインの事例1とグエン・ドン・チーのB)と登場人物が全く同名であり、内容もほぼ同一である。しかし、後半はグエン・ドン・チーのC) (事例2)と同じく侍従が登場し、3人の後を追って燃える藁の山に身を投げている。そしてこの従者の役割は、炉で熱い灰を維持するのに役立つレンガとなっている。侍従の名前の有無の違いはあるが、4人が登場するこの2話は類似しており、同じ話が元になっていると思われる。

3人と4人の登場人物の数の違いについて、伊藤もスタンも特に言及していない。しかし、伊藤は中国にも妻と新旧2人の夫と召使いが登場する説話があり、召使いは竈の火掻棒になっているという (伊藤 1999: 10)。

ベトナムではフィン・ゴック・チャンが、4人が登場する話はベトナムの竈神が三柱として

⁴ フランス語の翻訳は、沖縄国際大学の上江洲律子氏にお願いし、ご教示をいただいた。

祀られる以前の姿であり、竈神が三柱と変化した背景には中国伝来の八卦の考えが影響し、二陽一陰の八卦の「離☲」と符合するために作り替えられたと記している (Huỳnh Ngọc Trảng, Nguyễn Đại Phúc 2013:40-41)。

また、大西は竈神の3と4の数について直接言及していないが、ベトナム人の数の概念として、信仰対象は「偶数」を好み、「奇数」(特に「3」)は中国文化の影響であると、ベトナムの民間信仰の聖母道の神が16世紀～18世紀に3から4へ「偶数化」した事例をもとに論じている (大西 2009:14, 2011c: 127-144, 2017: 179-184)。竈神については、三柱はのちの変化であり、もともと中国由来の男神一柱が男神二柱になり、17世紀のベトナム女性の活躍により女神一柱が加わり三柱になったと述べている (大西 2013:14)。

竈神の昔話の登場人物の数に注目しながら、次にこれまで取り上げられてこなかった17世紀から18世紀に書かれたベトナムの竈神の話を紹介する。

(2) 17世紀の昔話

ベトナムの竈神について現時点での初出の記述は、アレクサンドル・ド・ロード神父が1651年に刊行した『安南語・ポルトガル語・ラテン語辞典』である。そこには、「灶、台所、灶君(もしくは灶公)、竈王、ファム・カオ」とある。昔話については記されていないが、このファム・カオは昔話の登場人物、チョン・カオとファム・ラーンに関係する可能性が考えられる。

ロードの辞典が出されて8年後、ベトナム人のカテキスタであったベント・ティエンが『安南国の歴史』を記している⁵。そのなかに、ベトナムの人々は「竈には灶君(Táo quân)を祀り、竈王(Vua bếp)と呼ばれる」として竈神の話を取り上げて説明している。現時点で最も古い竈神の昔話である。

事例4

(女性の)前夫は火の中に落ちて死んでしまった。女性は再婚しながらも、心では前夫を深く愛していた。後夫が昔の穴を見に行くと、妻は自分で穴に身を投げ死んでしまった。後夫は妻の死を知り自分も身を投げ出し、3人はその一つの穴の中で死んでしまった。

そして、人々は言う「それが竈の王(Vua bếp)であるなら、何かするときにはいつでも頼らなければならぬ。」⁶

(Bento Thiện 1659 “Lịch sử Nước Annam” Đỗ Quang Chính, Sj 2008 (1972):176)

この話は前半部分が欠如しているが、再婚譚であることがわかる。3人が同じ場所、ここでは火の穴の中で亡くなり、その後に竈神になるという展開は現在の話に通じる。しかし竈神が

⁵ ベント・ティエンがローマにいたイエズス会の宣教師に宛てた手紙の一部であり、ドー・クアン・チン(Đỗ Quang Chính)が2008(1972)に *Lịch Sử Chữ Quốc Ngữ 1620-1659* (『ベトナム国語(クオックグー)の歴史』)のなかで掲載している。ベント・ティエンの「アンナン国の歴史」については蓮田隆志が詳しく記している(蓮田2013「ベント・ティエン「アンナン国の歴史」簡紹一情報の流通と保存の観点から」『環東アジア研究センター年報』第八号:1130)。

⁶ 原文: Bếp thì thờ Táo quân, gọi là Vua bếp. Nó lấy chồng trước thì sa vào lửa mà chết, nó lại lấy chồng sau mà lòng còn thương nghĩa chồng trước, thì chồng sau đi xem nơi lỗ xưa, thì mình cũng sa xuống mà chết. Chồng sau thấy vợ chết, thì cũng gieo mình xuống mà chết, thì ba người vào một lỗ ấy; thì người ta nói bày đặt rằng: ấy là Vua bếp, thì phải cậy cho làm mọi việc nên. (下線は筆者)

三柱であることはここからはわからない。

(3) 18世紀の昔話

アドリアーノ・ディ・テクラ神父は、竈神 (Vua bếp) は女性が非常に崇拝する神であるとして以下の話を載せている (Adriano di St. Thecla 2002(1750): 147-149)。現時点で完成された竈神の昔話として最も古いものである。

事例5 〈梗概〉

チャオン (チョン)⁷・カオと ティ・ニーの夫婦は財産のことで争い、財産を全て夫に取られた上、夫の暴力も受けた妻は家を出た。三つの川の交わる橋の上でファム・ラーンに出会い結婚した。

ティ・ニーとの結婚後、ファム・ラーンは富を得た。チョン・カオは不幸が起き貧乏になった。ある日、チョン・カオは物乞いに行った家で妻に再会した。前夫に同情した妻は、食事と酒を十分に与えた。前夫は食事に満足し酔っ払い、寝てしまった。妻は後夫に見つかるのを恐れ、下男下女を呼び前夫を藁の山の中に隠した。

夫は狩猟から帰ってくると、獲ってきたシカを焼くために藁に火をつけた。チョン・カオは炎の中で死んだ。妻は前夫に同情し飛び込んだ。妻の死を見た後夫は動揺し飛び込んだ。

民間の人々は「男2人と女1人の竈王」としてそれら三つを崇拝することを始めた。彼らは三つのレンガと、もう一つ灰で被われた火 (火種) の上に四つ目のレンガを置くという。このレンガは夫婦のコンドーイ (con đoi) と呼ばれる。女性の召使いを表し、毎年正月には4人が描かれた絵を台所に掛ける。 (Adriano di St. Thecla 2002(1750): 148-149)

3人が登場する再婚譚である。それぞれの名前は現在も語られる昔話の登場人物と同じであり、構成もほぼ同じである。この話の異同は、下男下女が登場するが藁の山で死亡しないことである。しかし、3人の死後、3人を表象する三つのレンガとともに女性の召使いを表す四つ目のレンガが火種を保つ役割として置かれ、竈神の版画に4人が描かれる。女性の召使いが描かれていることも特徴の一つである。

(4) 昔話の変遷からみる竈神

本節ではベトナムの竈神の昔話をいくつか取り上げ紹介した。20世紀に収集、研究された昔話は職業や離婚理由などに多少の違いは見られるが、全て妻と二人の夫の登場する再婚型である。燃える藁の山の中で三人共が亡くなり、死後、竈神となる。この昔話は現時点では17世紀に初出する。

竈神の昔話を時間的変遷から整理をしていくと、1651年の辞典では昔話については触れていないが、ファム・カオという一人の人物の名前が記されている。この人物が何者であるかは分からない。しかし、その8年後の1659年の資料には、人々が竈神を祀る由来として3人の人物 (すでに前夫は亡くなっている) とその死が語られている。この時点でベトナムの竈神の由来

⁷ Traọng Cao (チャオン・カオ)と記されているが、訳者は現代のベトナム語の書き方では Trọng Cao (チョン・カオ) であると注釈を入れている。

譚が3人の死をもって語られていること、再婚型の話であることがわかる。ここから考えると1651年の辞典が作られた頃にも3人が登場する竈神の話があった可能性は高い。だが、昔話の結末が3人の死後に何柱の竈神となったかは不明である。

それから約100年後、1750年の竈神の話では、構造はそのままに、より詳細な内容で記されている。登場人物の名前は、2人の夫チョン・カオとファム・ラーン、妻の名はティ・ニーである。注目したいのは、この3人がレンガ三つを以って竈神三柱として祀られていること、そして女性の召使いが死後に火種を守るレンガという役割のもと、版画に4人が描かれる点である。第5章で述べているが、現在ハノイやフエにある竈神の版画には三柱の竈神と侍従二人が描かれており、侍従一人が描かれた版画はない。4人という登場人物の数は、大西が述べた18世紀までの民間信仰の神の数の変化と関連があるのだろうか。

しかし、ここでまず重要なことは、炉に置かれた土製支脚（レンガ）が竈神として祀られていることである。具体的には1750年の昔話で語られているが、1659年にもすでに3人が登場し3人が同じ火の穴で亡くなっていることからほぼ同じ話が語られて竈神が信仰されていたと考えられる。そうだとすれば、1659年の竈神も三柱であった可能性が高い。

次に2人の夫の名前と1651年の辞典の中のファム・カオについてみていく。このファムの名前は1651年では「Phám」、勢いが盛んで早いことを形容する語であり、1750年の「Pham」は「范」である（川本2011:1253,1244）。意味が異なるが、1651年ロードの辞典はベトナム語のローマ字表記の最初の段階であることを考えると、同じ「范」とみても良いかもしれない。しかしファム・カオの名前が二人の夫の名前：チョン・カオとファム・ラーンに分かれたとしても、1659年には3人の登場する話が語られているため、竈神が男神二柱であったとするのもう少し検証が必要であろう。

20世紀の竈神の昔話は、1750年に人々が竈神を信仰しながら語られていた話をほとんどそのままの形で語り継いでいることが分かる。もっとも忠実に継承しているのは、ロルフ・スタンが収集したV1（事例3）である。チョン・カオ、ティ・ニー、ファム・ラーンの名前で登場し、4番目の侍従が登場する。トアン・アインやグエン・ドン・チーも同じ名前で語られる話を取り上げている。また、4人目の人物は、グエン・ドン・チーの「山西人の話」（事例2）にも火種を保つためのレンガという役割を持つ侍従が登場する。4人という数に注目して実際の竈神の儀礼と合わせてみると、第2章の北部地域の竈神で述べたように、現在ハノイなどの北部地域では竈神の儀礼で四柱の神を祀る家がある。竈神三柱ともう一柱は土公あるいは神霊であったりするが、合わせて四柱用のマーを供えて燃やしている。このことが17世紀の4人が描かれた版画とどのように繋がるのかは未詳だが、興味深い一致であることは確かである。

20世紀の昔話で新しく加えられた点は、第2章の北部地域の竈神でも取り上げたように、トアン・アインの昔話に記された三柱それぞれの役割である。これは、20世紀に入って変化した北部地域の竈神の特徴と結びついている。実際の信仰と結びつき昔話の内容に変化が生じた事例である。

現時点で1659年に初出する竈神の昔話が現在まで語られ続けたことは、庶民の識字率が20世紀初頭までは非常に低かったことを考えると⁸、17世紀から口承で語り継がれてきたことに

⁸ 現在、ベトナムで使用される「クオックグー（国語: Quốc Ngữ）」は、ベトナム語をローマ字表記したものである。クオックグーの使用以前は、19世紀後半にフランスの植民地になるまで

なるのだろうか。もしくは、どこか一部地域に残っていた昔話が 20 世紀に入り研究が行なわれ、取り上げられると同時に、人々の識字率が上がり文字が読めるようになったことで新たに広がっていった可能性もあるだろう。

ベトナムの竈神の昔話が 17 世紀の話の構造をほとんど変えることなく語り継がれてきた背景には、炉に置かれた土製支脚を使用してきた人々の暮らし方とそこに密接に関わる信仰があったと考えられる。そのことが土製支脚を竈神三柱として祀ることにつながったのだろう。

次節は、再婚型としての竈神の由来譚、竈神の数や火との結びつきにも注目して中国や日本、沖縄との比較からベトナムの竈神と昔話についてみていきたい。

第 2 節 東アジアの竈神と昔話

第 1 節でみてきたベトナムの竈神の昔話と比較をするため、本節では、日本本土、沖縄、中国、朝鮮半島の東アジアの各国や地域の話を取り上げる。東アジアの竈神や炭焼き長者型の昔話は十分な研究が行なわれてきているため、ここでは資料をもとにみていきたい。

もう一つ、現在はベトナムの少数民族となっているが、元来はキン族と同族であったといわれるムオン族の竈神の話もみていきたい。

(1) 東アジアの昔話

伊藤は「炭焼き長者」初婚型、再婚型と分類した民間説話が日本列島、朝鮮半島、中国大陸、台湾、ベトナムなど東アジアの各地に分布するという（伊藤 2003:13-21）。

柳田により日本国内で詳細な研究がされてきた「炭焼き長者」の説話のなかに竈神由来を語るものがあり、死体を竈神として祀るという同じ形式の話が中国でも採集されていることを指摘したのは松本である（松本 1956:149-163）。ここでは、竈神由来譚を「炭焼き長者」型の昔話を中心に日本、沖縄、中国、朝鮮半島から取り上げたい。

① 日本

日本の竈神は、地域による多様性をもって祀られることは周知のとおりであり、昔話についても同様である。ここでは、大島建彦が柳田や伊藤などのこれまでの竈神の由来譚に関する資料に加えさらに収集した昔話や資料から整理をしているため（大島 2003:155-182）、主に大島の資料を参考に述べていきたい。

「炭焼き長者」型に竈神の由来が語られる話がみられる。関敬吾の『日本昔話大成 3』（関 1978）で初婚型と再婚型に分けられた「炭焼き長者」型の話をもとに分類すると、『大和物語』の芦刈説話や『神道集』の「釜神事」も再婚型に属する。またこの再婚型は、「産神問答」「運定め話」の「男女の福分」と深く関わりながら伝えられた話である（大島 2003:164-167）。しか

は漢字・漢文が公式的な文字・文章であり、ベトナム語を表現するためにベトナム独自の漢字「チュノム：喃字」が作られたが、これらは主に科挙試験を受ける一部のエリート層のものだった。クオックグーが使用され、庶民への識字運動は 20 世紀初頭の愛国の志士、ベトナムの解放運動の担い手たちにより、そして 1945 年八月革命の後には国の方針で進められていく。（今井 1997, 村上 2006: 20-22）

し、伊藤や大島も指摘しているが、竈神の由来を説くものは少なく、大島が青森から沖縄にかけて収集した事例は11話であり、そのなかに沖縄の2話が含まれている。その収集された地域も限られており、大島は、竈神の信仰がそれぞれの地域の伝承によりかなり異なる様相を示しているからだと述べている（大島 2003:168-169）。また、再婚相手が炭焼きである事例は、日本本土には徳島県海部郡海南町大田の伝承として大谷女子大学説話文学研究会の『浅川・川東昔話集』に「三宝荒神さんのお話」（大島 2003:173）として記された1話である⁹。

「炭焼き長者」型以外では、佐々木喜善の『江刺郡昔話』の「ひよっとこの始まり」（佐々木 1976(1922):13-15）にあるように醜い童や乞食が家に繁栄をもたらし、竈神として祀られる話が岩手や宮城には伝承されている（大島 2003:176-178）。これは、飯島が竈神を家屋の暗い裏側で祀られる神々の代表として、境界性を持ち、否定性と肯定性を持つ両義的な神と位置付ける竈神の性質が現れている話である（飯島 1986:9-15）。また、飯島は日本の竈神と荒神が習合した背景に、陰陽五行思考や土公信仰の影響があったと記している（飯島 2018:35）。日本とベトナムとの比較において竈神の両義性をみていくこと、竈神の土公の関わりは興味深いことであるが、ここでは、東アジアでの比較をするために「炭焼き長者」再婚型に着目していく。

この話型の結末では、死亡するのは妻の前夫一人である。妻と離縁した後（離縁の仕方は、妻が一方的に離縁されることが多いが、芦刈説話では貧しさから別れたとされる）、再婚した妻は幸せに暮らす。前夫は乞食として妻の前に現れる。そして、前夫が死亡するのだが、その亡くなり方は、以下のとおりである。①妻と気付き驚いて死亡、②恵んでもらったおむすびのなかの銭に気付かず、喉に詰まらせ死亡、③妻の家に雇われてその後、死亡するのである。その前夫が竈神となる理由は、死亡場所が竈と関係している。竈の前または後ろで死亡、または違う場所で死亡するが竈の下に埋められる。そして、妻は前夫とは明かさずに竈の神として祀っている。

②沖縄

仲松弥秀は沖縄の火の神について次のように述べている。火の神は、祖先神以外で人々の生活に大きい影響を及ぼす最もよき神として重んじられている。カマドの煙は家をあらわし、その火は家族を養育する。古代人が火のセジ（灵力）に驚異し、家族の生命の守護者ともいえる火を神とするようになったのは当然である。家族は一つのカマドによって生命が維持される。カマド神は家の保育神であり守護神である（仲松 1975:90）。

沖縄の火の神は、柳田をはじめ多くの研究がされてきた¹⁰。そのなかでも、古家信平は沖縄における火の神信仰についての研究史を整理・分析し、移灰の諸相やユタと火の神の関わりについて事例をもとに論じており（古家 1994:70-151）、窪徳忠は、漢民族における竈神の習俗、歴史、道教との関係などをもとに、沖縄各地域の火の神の諸側面を調査し沖縄の火の神は琉中複合信仰であるとして述べている（窪 1989, 1990, 1997）。沖縄とベトナムは、竈神の信仰と儀礼において中国の影響をともに大きく受けており、その際の取捨選択や習合の仕方などからも比較研究が可能である。しかし、ここでは昔話から述べていく。

⁹ この話では、三宝荒神が祀られるが、真ん中が女性で両端に男性2人であると語っていて、興味深い。大島は三宝荒神の解説はしているが、三柱が中央に女性で両側に男性という配置について言及していないため、別の機会でも取り上げてベトナムとの比較研究を行いたい。

¹⁰ 折口信夫（1923, 1947）、馬淵東一（1968）、伊波普猷（1974）など。

柳田は「炭焼小五郎が事」のなかで炭焼き長者の話が津軽から宮古島まで分布するとして、日本における分布の一つとして位置付け、また沖縄の三石の竈と宇佐の山上の巨大な三石との共通性を示唆し日本本土との関連から述べてきた（柳田 1940）。火の神に関する研究や柳田が行なってきた炭焼き長者譚については古家が丁寧に整理し再考しているため（古家 1994:70-89）、ここでは沖縄の火の神の由来や関連する話をベトナムや東アジアとの比較の観点からみていく。

沖縄の火の神の話は、竈神の由来を説く「炭焼き長者」再婚型、火の神の出自を説くもの、そして火の神に関連するヒーダマ（火魂）に分けられるが¹¹、竈神の由来を説く話を取り上げ、最後に少し沖縄の特徴に触れておきたい。

柳田が「蘆刈と竈神」で記した「宮古の話」は、鍋のヒスコ（墨）をつけることから、実際には竈神となったとは記されていないが竈の神の信仰に基づくものであると述べている（柳田 1940:237）。そのほかに沖縄には竈神の由来を説く「炭焼き長者」再婚型の話がある。「運定め」の話で始まり、夫婦は離婚して炭焼きと再婚した妻は裕福になり、離婚した前夫は貧しくなる「男女の福分」とも関わる話は、窪が与那国で採集した話（窪 1997:521-523）や、『いらぶの民話』に「寄り木の主」（『いらぶの民話』¹²1989:75-79）として収められている。そこでは、夫が妻の料理に文句をいい追い出したあとに物乞いとなり、再婚した妻の家とは知らずに訪れ、妻の出した料理を美味しいと食べ、そのあと妻に気づき驚いて死亡するのである。その前夫を妻は、今の夫には内緒で竈の下や後ろに埋め、または前夫を埋めた上に竈を作り、竈の神として祀ったとある。

ここで一つ注目したいのは、前夫を埋めて神として祀っているのが「竈」という点である。沖縄の台所の形態を考えると、人々の煮炊きが三石の炉から竈に移った後でこの話が語られるようになったということが出来る。沖縄の台所の変遷の時期や経緯については調査ができていないため未詳だが、今後詳しくみていきたい。

沖縄には、「炭焼き長者」再婚型とは異なる火の神の由来を語るものがある。伊波普猷が火の神の出自を太陽に求め、取り上げてきた『久米島仲里間切旧記』¹³の「比嘉村物作「比嘉村物作之為浜下り之時嶺井比屋火の神前に而御たかべ言」である。ここには、火の神が女神三柱であることが記されている。火の神の出自と性別、数が述べられた部分を上江洲敏夫の現代語訳で以下に記しておく。

昔々、大昔、アマミキヨ＝シネリキヨが国を造られた時から、嶺井の氏の長者、村落の根所の長者が、台所に勧請し給うた火の神様の御出自は、東方の美しい磯の真下から・真中から、のどかにお生まれ給うた姉妹三所・細腰（乙女）三所であらせられ、ニライ・カ

¹¹丸山顕徳は、『沖縄民間説話の研究』に「火の神」と「火魂」とを区別し、「天の神の命令で火事をもたらす恐ろしい「火魂」として火の神の話を書いている。そのなかでヒーダマ信仰による伝承の実体を①報恩型（『日本昔話通観（沖縄）』『火の神第退散一川渡し型』）②善行型（『日本昔話通観（沖縄）』『火の神退散-嫁のところがけ型』）③異人歓待型（『日本昔話通観（沖縄）』『大みそかの客型』）④退治型（『日本昔話通観（沖縄）』『閉じ込め型』）と4話型で紹介している（丸山 1993:42-46）。

¹² 同じ話者のほぼ同じ話が「男女の福分」類話 15『日本昔話通観』26:22-23 に掲載されているが、結末部分が幾つか異なっている。

¹³ この旧記は古家によると、1703年ごろの成立と言われ、御嶽名と神名、祝詞、歌謡、年中行事など約80項目が記されており、1713年首里王府で編纂された『琉球国由来記』巻19と対比すると編纂過程をうかがうことができる貴重な文書である（古家 1994:77）。

ナイに居られる時は、乙女の小腰・若娘の小腰、中空・道中に居られる時は、飛合い・舞合い様（嶺井比屋の火の神）であらせられる。今日の果報時・吉日にお願い申し上げます

（上江洲 1976:33-32）

この女神三柱は、炉に置かれた三石に由来するものであろう。以上のことから、沖縄の火の神は、「三石」と「竈」と「火」に関する名称があり、それぞれにまつわる話が語られていることがわかる。台所の形態と名称、そして神としての名称、それらに関わる昔話は、沖縄が中国や日本本土の影響を受けながら、その歴史のなかで取捨選択してきたものであろう。

また、沖縄には家レベルの火の神と村火の神のように琉球国政府が関わる火の神の区別がみられる。本論文で沖縄とベトナムの比較を掘り下げていくことはできないが、沖縄の火の神を琉球国の祭祀と庶民の信仰の関わりや琉中複合信仰のなかの中国の影響の取捨選択、台所形態の変遷を通時的にみていくことで、東アジアの中国文化圏のなかでも特に沖縄とベトナムの竈神の比較研究として発展できると考える。

③中国

中国の「炭焼き長者」型の昔話は、伊藤が多く収集し、初婚型、再婚型に分類をしている（伊藤 1991:161-201）。まずはそれに沿って述べていく。

「炭焼き長者」の再婚型は、ほぼ竈神の由来を説く話となっている。伊藤が記した構成を簡潔にまとめると、1) 金持ちの夫婦がいたが、夫が妻を離縁する。2) 妻は貧しい男と再婚する。3) 再婚した妻は金持ちに、離婚した前夫は乞食になる。4) 妻の家とは知らずに物乞いに来た前夫に、妻は金品を隠して与えるが気付かず、再び物乞いに来る。そしてその結末は、5) 妻が前夫に金品を入れたことを告げると、自分の不運を嘆き、恥じて竈の中に入って死ぬ。山東省、浙江省、広東省などで採集した話には「灶王的来歴」など竈神の由来譚であることが話の題名にも記されている。また、ミャオ族の「竈神故事乙」は、この炭焼き長者「再婚型」として分類している。

初婚型には、結末が異なる AB 2つのタイプがある。話の構成は、父親が末娘を勘当または自分で家を出る。乞食や芝刈り、炭焼きと夫婦になり、家の周りから金銀を発見し金持ちになる。そして A タイプの結末は、娘を追い出した父親が零落し不幸な最期を遂げる。そのなかには竈神として祀られる話があり、チワン族に零落して物乞いとなって娘の家を訪れた父親が恥じて死に竈神として祀る話がある。もう一つの B タイプは追い出した父親を金持ちになった娘が受け入れ全員がハッピーエンドになる話で、このタイプには竈神として祀られる話の結末はみられない。

伊藤は竈神由来譚を「炭焼き長者」型として収集し分類してきたが、飯倉は中国の竈神の話をも、①福分ある女性の運命譚と関わりある話、②張郎夫婦の物語を語る昔話と地方劇として分類している。①では少数民族と漢族に区分され、初婚型にはブイ族の話、再婚型には苗族の話が取り上げられている。②の張郎夫婦の物語は、「竈書」として文化大革命以前は河南省から安徽省にかけて上演されていたものであるという（飯倉 1991:42-55）。

千野明日香は、伊藤の「炭焼き長者」初婚型と再婚型はあくまで日本の昔話の分類による話型名であるとして、中国で「炭焼き長者」譚に対応する話は、福運ある女性が登場する運命譚の2つのサブタイプ①「自分の運命によって生きる王女」と②「金貨を見分けられない乞食」であるとして論じている。この視点によると、漢族と少数民族との区分が明解である。①「自

分の運命によって生きる王女」は少数民族で多く語られ、華中のミャオ族、華南のチワン族、ヤオ族、西南部のペー族、ハニ族、サニ族、チンポー族などである。②の金貨を見分けられない乞食は、ほぼ漢族の話であり、「竈書」もここに分類される。そして、①が、財宝の認識がモチーフであるのに対し、②には財宝についてのモチーフほとんど現れず、福分の有無が重要視されると記している（千野 1994:21-38）。

千野の論じた分類からベトナムの竈神の由来譚をみると、②「金貨を見分けられない乞食」と類似していることがわかる。ベトナムに入ってきた竈神の由来譚は②タイプの話であり、登場人物の名前などから張郎夫婦の「竈書」の可能性が考えられる。しかし、結末は異なる。結末の異なる点については、本章の最後に考察をしていきたい。

④韓国

「炭焼き長者」型の朝鮮半島での類話は、松本が発表した「芋掘長者の話」が知られている（松本 1956:159-160、伊藤 2007b:219-220）。しかし、この話は竈神の由来とはなっていない。伊藤も朝鮮半島の「炭焼き長者」初婚型の話載せているが、これも竈神の由来譚とはなっていない。また、松原の朝鮮における炭焼き長者系の説話の比較のなかにも竈神の由来を語る話は述べられていない（松原 1994:39-52）。

韓国にはこれまで述べてきた「炭焼き長者」型の竈神の由来譚は管見の限り報告されていない。しかし、竈神が登場する話として済州島にある門前ポンプリがある。済州島の竈王に関連する話を少し記したい。韓国の本土でムーダンと呼ばれる巫覡は済州島ではシンバンと呼ばれ、そのシンバンが神のいわれを説く神話がある。その一つに門前ポンプリ（本解）という門前神のいわれを解く話がある。概略を述べると、夫婦には7人の子どもがいたが、夫は出稼ぎに行きその先で妾を作る。妻は夫を探しに行くが、妾は夫を探しに来たその妻を池または川など水のなかで殺して、自分が妻になりかわり家に戻る。しかし、末子がそれを見抜いて、妾は死ぬ。その末子が門前神として祀られる話である。その後、死んだ妾は厠の神になり、夫は家の入り口の柱木の神になり、そして妻が竈王になるのである。門前ポンプリは竈王が中心の話ではないが、竈神の視点でみていくと、興味深い点がある。一つは、女性（妻）が竈神となっていること。二つ目は水と関わる場所で死亡した妻が竈神となることから、火を扱う竈と水との関係である。

韓国の竈王の特徴をあげると、一つは家の神であるソングジュ神との関係である。ベトナム・キン族や中国・漢族、沖縄で祀られる竈神は、台所の神であり家族の保護をする最も重要な神とされているが、韓国の場合では最も重要な神はソングジュ神とされ、竈王は台所の神として区別されている。

二つ目は、竈神を祀るために竈の側に置かれる水の入った椀である。この水の入った椀は、竈王への供物である、または神体であるとその考えは二分している。火を扱う竈の神の神体が水であるということ、また供物か神体かという問題は非常に興味深く、重要な視点である。

（2）ベトナムの少数民族ムオン族の昔話

ここでベトナムの少数民族ムオン族の話を取り上げたい。ムオン族とは、キン族と同源であり、両者の共通祖先の一部は中国をモデルにした国家を形成しキン族となり、他は山間でタイ（Thai）族に由来する組織原理に基づいた大小のムオンを形成し、「ムオンの人々（ムオン族）」

となった民族である(宇野 1999:138, 2000 :673)。まずはじめにムオン族の竈と竈神についてフランスの人類学者ジャンヌ・キュイジニエ (Cuisinier, Jeanne) の資料¹⁴をもとに述べ、次に昔話を記していく。

①ムオン族の竈と竈神

・竈の配置と構造

ムオン族の家では、多くの炉は家の中心に置かれ、正規の炉より小さい炉を外側部分に置き、お茶を沸かすためだけに使う。構造は、枠の一边は約1平方メートル、厚い板で枠を作り、土をかける。枠の中に三つの石をお互いに投げかかるように少し傾けて置く。

・炉の神

ムオン族と安南人は炉の神を具象化し、ムオン族の言い方ではブア・ベップ (bua bep (炉の王))、安南語ではヴァ・ベップ (vua bép) と呼ぶ。近年は市場で購入した3本足の五徳が置かれるようになったが、五徳に変わってもその前に一つの石が立ててある。また、ムオン族は炉の神の祭壇を置く場所に一定の規定はないが、禁忌としてムオン族とタイ族は神像に触れることを禁止している。そして、神像を倒したり削れたりすると災禍に遭うといわれている。

ムオン族は土地神や土公なども祀っているが、ここでは省略する。次にムオン族の竈神の昔話を述べたい。

②ムオン族の昔話

事例 三つ石の話 (Sự Tích Ba Hòn Nục) ¹⁵

ある夫婦に娘がいた。娘は大きくなり両親を養うために婿をとった。しばらくして夫(婿)は兵役で軍隊に入るため家を出た。妻は夫を愛して待ち続けたが、ある日夫が戦死したという知らせを聞いた。両親と生活のために新しい婿を取り再婚することに決めた。

長い年月が流れ兵役の期限を終えた夫が村へ帰ってきた。村の近くに来たとき、妻が再婚したと聞いた前夫は乞食の姿になり、その真偽を確かめると妻には本当に新しい夫がいた。しかし妻と妻の母親は前夫に似た乞食がくるたびに大切に接した。前夫も二人がまだ自分に愛情があるのを感じた。しばらくして近くの村から夫婦にうわさが届いた。兵役に行った前夫が戻ってきて妻の家の様子を観察している、新夫とどう対面するのかと。それから新夫は日夜心配になった。

ある日、村の仲間が狩りに出かけたが新夫は誘われなかった。子鹿を獲た村人たちはドラを

¹⁴ キュイジニエの *Les muong* は 1948 (1946) 年に出版され、1995 年にはベトナム語が出版されている (Cuisinier, Jeanne 1995)。本書の特徴は、先行研究や関連する膨大な文献を渉猟しながらフィールド調査に基づき、百科全書的に丁寧に叙述した点にあり、ムオン族の文化を人文地理と社会学の2面から考察しようとした長大な研究である (福田 2005 : 238)。

¹⁵ Sự Tích Ba Hòn Nục の「nục」には、ベトナム語には土製支脚や三つ石に関する意味はない。ムオン族の炉で祀る信仰についての説明には、三つの nục はキン族の三つのダウザウ (土製支脚) のこと Trong lò bếp người Mường, dù cho đến khi có kiềng sắt, người ta vẫn dùng ba hòn nục (còn gọi là ba ông đầu rau – người Kinh) とある (民族文化専門ページ: ベトナム文化・スポーツ・旅行部 <http://dantocviet.vn/>)。また、ベトナム語「núc」には、鍋をのせる土台、竈を作るためのレンガとある (川本編 2011:1098)。

鳴らしながら帰ってきた。新夫はドラの響きが近づくにつれて、自分を惨い目にあわせるために村人たちが前夫をつれて来たのではないかと心配し、ゴミ山の中に身を隠した。午後、妻の母がゴミ山に火をつけた。しかし、新夫は周辺から聞こえる村人たちの声に不安になって外へ出なかった。仕事から帰った妻は紙くずを帚で掃き、燃えているゴミを広げるとそこに夫が焼け死んでいるのを見た。妻は悲しみ、前夫が酷い仕打ちをするのではないかと心配し、燃える火の中に飛び込み死んでしまった。その日、前夫は妻と妻の母に自分が兵役から戻ったことを伝えるために来るつもりだった。惨い目にあわせるつもりはないこと、二度と会いに来ないと妻と新夫に伝えるために、二人の死を自分の責任と感じ、同情し運命をのろい、前夫も燃える火の中に飛び込み死んでしまった。村人は三人を哀れみ葬儀を行った。埋葬するため、燃えた火の粉を掘りだすと、揃って燃えた三人の頭が誰の頭なのか分からない。そこから、人々は火災を避けるため、燃えた三つの頭をまねて、鍋などを火にかけるための三つの石の台にした。テトの日、人々は三人に供える供物を準備してそこに置く。その供物は竈王を祀るためのごちそうだという。

(Bùi Thiện 1978 : 255-257, 1988 : 83-84)

③ムオン族とキン族の昔話の比較

ムオン族とキン族との共通点は、妻1人と夫2人の3人が、話の結末で燃える火のなかで亡くなり、死後に竈王（竈神）として祀られることである。ムオン族の竈神もテト（旧正月）に3人に供える供物を準備すると語られていることから、三柱であることがわかる。相違点は、ムオン族では妻の母親が登場すること、3人の死亡の順序について後夫が先に亡くなっていること、死亡場所がゴミの山であり妻の母親が火をつけたこと、燃えた頭蓋骨から三つ石を祀ることになったこと、天帝などの他の神が登場しないことがあげられる。死亡場所がゴミ山と藁山の違いはおそらく生業の差だと思われる。また、ムオン族の竈神が火災を避ける神である点にも注目したい。天帝の出現がないのは、ムオン族が道教の影響を受けていないためであろう。そして、キン族は炉に三つの土製支脚を置いていたが、ムオン族は三つ石を使用してきた。その違いが三つの頭蓋骨に表象されたのではないかと考えられる。昔話の類似はムオン族の話がキン族の話をもとに作られた可能性も考えられる。

第3節 昔話からみたベトナムの竈神の特徴

(1) ベトナムの竈神の昔話の特徴

東アジアにおいて「炭焼き長者」型の竈神由来譚を比較すると、日本や沖縄では再婚型で産神問答や福分と関わる話であり、中国の漢民族ではほとんどは「竈書」として上演されていた張郎夫婦の物語を語る昔話であり、これもやはり再婚型である。また、中国では漢民族と少数民族の間では千野の指摘のように男女の福分と福分の現れ方に差が顕著であり、少数民族で多く語られる財宝認識も重要となっている。

竈神の由来譚は、中国や日本、沖縄では結末が共通している。死亡するのは大抵1人で前夫または初婚型であれば父親となる。例外として2人が死亡する場合もあるが非常に少ない。また、死亡場所は中国の漢民族では竈の中、竈に頭をぶつける、日本や沖縄ではその場でショック死しその後に竈のそばに死体が埋められ祀られる。

ここからベトナムの竈神の昔話の特徴をみていくと、構成や話の筋は、中国の「竈神」の張郎夫婦の物語に類似しており、財宝認識のモチーフは全くなく、金貨を見分けられない乞食ではないが、福分のない前夫であることは同じである。しかし、結論が大きく異なる。その特徴を挙げると、一つ目は、3人共が死亡し、その場所も同じ火の中である。また、亡くなる際の妻と2人の夫の関係として、3人がそれぞれに愛情を持っていることが重要な要素となっている。二つ目として、18世紀から現在にかけて、昔話のストーリーがほとんど同じであること、そして三つ目として、竈神の信仰とともに昔話が伝えられていることである。

ベトナムの竈神の昔話は、おそらく17世紀には中国の竈神由来譚をもとにベトナムの炉に置かれた土製支脚を神として祀る信仰を語る話として、その信仰に適合するように作られていたと考えられる。その話はおおかた中国漢民族の張郎夫婦の物語を取り入れたのだろう。土製支脚を神とする三柱の竈神の由来を語る話として、中国の竈神由来譚の構造を利用したといえることができる。

(2) 昔話からみたベトナムの竈神の特徴

次に、昔話からベトナムの竈神の特徴について考えてみたい。

まず、一つ目は、再婚譚と3人の死の結末である。愛情ある3人の関係は、ベトナムで土製支脚を使用していたことが大きく関係していると考えられる。三つで一つという土製支脚の機能が、愛情ある3人の関係を強調し、三柱の竈神に結びつけたのだろう。そして、男性2人と女性1人の関係と3人の死は、「炭焼き長者」再婚型の構造を単に用いただけではないのではない。そこには、第2章のホイアンの竈神でも触れたように二陽一陰で表される八卦「離」☲との関係が考えられる。また、李・陳王朝（11世紀—14世紀）に成立したベトナム最古の漢文説話集『嶺南摭怪』に収められた「檳榔伝」の登場人物も、男性2人（兄弟）と女性1人（兄の妻）であり、ベトナム人の生活形態の特徴、古俗である強い女権、また数の概念が関係してくる可能性もある。檳榔伝と竈神の昔話の共通性としてスタンも指摘した三つで一つのものとしての繋がりも関係してくるであろう。

二つ目は、燃える藁の山の火の中で死亡することから、火との関係が指摘できる。前述した八卦の「離」とも関わるが、陰陽五行思想との関係からも論じられる可能性があるのではないだろうか。ここで、ほんの少し考察を試みたい。現在もフエ地域では、竈神の儀礼として毎年行なわれているのが神体（土製支脚）の交換である。これは、以前はベトナム全土で行なわれた儀礼である。その際、古い神体である土製支脚は神聖な木の下に捨てていた。このことを、陰陽五行思想の相剋の木剋土からみると、古くなった土製支脚を木の下に捨てるといえるのは、古くなった神（土製支脚であり、すなわち「土」である）に宿る災いを「木」の霊力で鎮めることができると考えられないだろうか。また、相生の木生火、火生土からみると、「土」は土製支脚であり、「木」から神聖な「火」の神を生み、その「火」から竈である「土」（＝竈神）が生まれる。神の再生という見方は可能ではないだろうか。

ベトナムの竈神の昔話をみていくと、ベトナムが中国のさまざまな要素を取捨選択するなかで、中国の竈神の昔話の構造を取り入れ、自分たちの信仰に適合させ、また風水思想や陰陽五行思想も積極的に取り込んで融合してきたと考えられるのではないだろうか。それは実際の竈神の信仰や儀礼にもみられる。

終章 —結論と今後の課題—

第1節 結論

これまでベトナムの竈神について、民間信仰という視点から歴史学的・民俗学的に多角的なアプローチを試み、ベトナムの竈神とその国内の地域性を明らかにしその背景を考察してきた。そして、多様な祀り方がある一方で共通して人々にとって竈神は家族や家を守り繁栄を祈念する神としての性格を持つことを各章で述べてきた。本章では、各章で述べてきたことからベトナムの竈神とは何かを明らかにし、竈神がベトナムの民間信仰のなかでどう位置付けられるかを論証する。そして竈神の信仰と儀礼をとおしてベトナムの家の神のあり方を示したい。

(1) 通時的視点からみたベトナムの竈と竈神

「オンタオ(翁竈)」と呼ばれる竈神について、実用品としての竈と信仰としての竈神をそれぞれ通時的にみていった。それにより、ベトナムの竈神の特徴である三柱が生活のなかで長く用いられてきた土製支脚を表象していることが明らかになった。人々の暮らしのなかで重要な役割を担ってきた「炉に置かれた土製支脚」は、いわゆる竈と呼ばれる「造り付け竈」とは構造や機能に違いがある。そのことが、ベトナムの竈神や昔話の特徴を作り出しているのである。まず、炉に置かれた土製支脚が竈神「オンタオ」として祀られる経緯を整理したい。

実用品としての竈は、土製支脚が後期新石器時代後半期の遺跡から出土する。その土製支脚が多少の形を変えながらも現在まで継続されている。その過程で一般的には土製の移動式焔炉や五徳などを経てガスコンロへと変遷するが、中国や日本で用いられた造り付けの竈はベトナムでは普及しなかった。

この土製支脚の名称は、17世紀のロード神父の辞典にはダウザウ(Đầu rau)と記されている。20世紀の研究者によると北部地域でダウザウ、中部ではヌック(núc)であると記されている。しかし、キン族と同族であったといわれるムオン族も土製支脚を声調は異なるがヌック(nuc)と呼んでいる。そのことから北部地域でも用いられた古い用語の可能性が考えられる。これらの用語は漢字に置き換えができないベトナム語である。

次に、竈神の名称をみると、17世紀の辞典には二つ記されている。一つはベトナム語で「炉の王」(bua bép(現在の vua bép))であり、もう一つは漢越語で「竈公または竈君」(Táo công)である。これらの言葉は竈(タオ táo)の説明として記されている。また、土製支脚であるダウザウも竈神の名称として、20世紀の資料や現在でも北部地域の人々のあいだではダウザウ翁(Ông Đầu rau)として呼ばれている。

以上のことから、現在のベトナムの竈神の名称である「オンタオ(翁竈)」の「タオ(táo竈)」は、実際の道具である竈を指すのではなく、竈神に対して用いられた言葉であることがわかる。また、「竈」(タオ táo)の見出しに「炉」(ベップ bép)と付記されているのは、炉(ベップ bép)という言葉を用いて竈(タオ táo)を解説する必要があったということであり、ベトナム語の bép や vua bép の用語が táo よりも先に用いられていたといえる。それらのことをあわせて考えると、炉に土製支脚(ダウザウまたはヌック)を置いて神体として祀っていたものを、おそらく17世紀の辞典が作られるよりも少し前のある時期に、中国の竈神であるタオクアン(táo quân 灶君)の信仰が伝わり、名称を取り入れたと考えられる。そして、その同時期に竈神が上

天する儀礼や役割も入ってきたのだろう。タオクアンからオンタオへと親しみを込めて呼ぶようになった時期は不明だが、オン（翁）を用いたのは、おそらく版画などに描かれた中国の男神一柱の竈神の影響が可能性として考えられる。

（2）東アジアの昔話の共通性と独自性からみたベトナムの竈神

土製支脚が神体であることを語るベトナムの昔話は、現時点では17世紀に初出が確認された。東アジアの昔話との関連性をみると、構造は中国の竈神由来譚の再婚型、日本の炭焼き長者または男女の福分、産神問答の再婚型に類似する。しかし結末をみていくと、他の国や地域では語られていない、妻と前夫、後夫の三人が同じ場所、火のなかで亡くなるという特徴がベトナムの話にみられる。さらに重要なのは、17世紀から現在まで竈神を祀る理由としてこの昔話が信仰とともに語られてきた点である。

ベトナムの昔話の独自性がみられる結末部分は、竈神三柱の由来を語る最も重要な場面である。ベトナムの昔話の変遷を整理し、東アジアの昔話と比較し分析することで明らかになったのは、もともとベトナムで信仰されていた土製支脚を神体とした三柱の炉の神を祀るために、中国の竈神由来譚の構造を利用したということである。つまり、自分たちの竈神三柱の由来を説く話として新たに作り変えたのである。そのため、竈を使用しないベトナムでは、生業である農業と自分たちの暮らしに身近で重要な藁山を火で燃やし、そこに3人が飛び込み、さらに妻と2人の夫の愛情ある関係を設定したのだろう。

中国の竈神の影響や由来譚を取捨選択するなかで、全体的な話の構造は取り入れたが最も中心となる土製支脚を神体とした三柱の部分は自分たちの信仰を変えなかった。この昔話からわかるのは、炉とそこに置かれた土製支脚が長い時間をかけて家族の暮らしにとって重要な空間であり、道具であり、そのために家族を守る神として祀られ信仰されていたということである。そしてそれは現在も継続している。

（3）ベトナムの竈神とは何か —民間信仰の視点からみた竈神の地域性と共通性—

次は竈神を祀る儀礼の実態と人々の観念についてベトナムの内部の地域差と竈神に対する共通性をみていきたい。そして地域性と共通性からベトナムの竈神とは何かを考察したい。

① 北部地域

現在の北部地域における竈神の祀り方の最も大きな特徴は、台所ではなく祖先の祭壇で祀ることである。どのようにして、またなぜ祖先の祭壇で祀られるようになったのかを述べるために、まず台所（炉）の配置と祀り方について整理する。

13世紀の資料によると、庇の低い家の屋内に炉が置かれていた。しかし、その頃の竈神については未詳である。その後の炉の配置に関する資料や報告はなく、17-18世紀に土製支脚や土製焔炉の遺物が出土されているが住居の空間配置については記されていない。そして、20世紀に入ると、家屋とは別の付属屋に炉が作られていることが報告される。一方で竈神の祀り方は、18世紀には土製支脚を神体としつつ、竈神の絵を台所に貼り祀っている。その後、20世紀の資料には実用品そのものが神体とされていることが記されている。

北部地域では、古くは家のなかに置かれていた炉が付属屋へと移り、そして1990年前後に家のなかにふたたび台所が作られる。特に20世紀中葉から21世紀にかけて台所の構造は大きく

移り変わる。地炉から人々が立って使う台へ、土製支脚や五徳からガスコンロへと変遷する。そのなかで神体となる「物」がなくなり、また北部地域の社会政策の影響も関係し、祖先の祭壇に置かれた香炉へと移ったと考えられる。竈神の祭壇を持たないことで、一見すると竈神に対する重要性は低いようにみえるが、実際には家の中央に置かれた祖先の祭壇のその中央の香炉で、祖先を祀るよりも上位に置かれて祀られているのである。そこには、もう一つ重要な点として土公との習合がある。

土公とは、17世紀のロード神父の辞典によれば土地を守る神として記されている。しかし、次第に土公の役割は竈神と重複していく。20世紀初め頃まで土公と竈神は区別された神として記されていたが、20世紀中葉以降になると同一視または混淆されていく。竈神の祭祀はオンコン・オンタオと呼ばれ、土公（または神霊）一柱と竈神三柱を祀り、四柱の供物を用意する例もみられる。そして、土公と竈神が習合することにより、竈神は台所での煮炊きや家族を守る神としてだけでなく、家、家族、祖先も含めた屋内、屋外の全てを保護するさらに強大な神となったのである。それは北部地域の人々の言葉による意識された竈神への観念よりも実際の人々の行為のなかにみることができる。

北部地域では、土公という土地神の役割を持つ中国の信仰を独自の形で取り入れ、さらに竈神と習合させることで新たな家の神を作り上げたといえることができる。

②中南部地域

現在の中南部地域における竈神の祀り方の特徴は、祭壇で祀られる「定福灶君」の神牌と竈神の儀礼で用いられるマー（Mā 紙製の冥器）のセットである。中南部地域は北部地域と異なり、明末清初にかけて多くの中国人が移入してきた歴史がある。その中国系移民の影響は、特にマーのセットから広東とのつながりが明らかである。しかし、それらの祭具は商品（＝「物」）としての流通の影響が強く、信仰として中国の竈神が大きく影響を与えているわけではない。なぜならマーのセットのなかには、三柱用に金銀紙や蠟燭が三つずつ用意されており、中南部地域の人々はそのマーを用いてベトナムの三柱の竈神に対して祈願しているからである。中国の竈神儀礼用のマーや神牌などの道具は、中南部地域の人々にとっては三柱を祀るための「モノ」であるといえる。

そして中南部地域の人々にとっても竈神は家族を保護する重要な神であり、竈神に対して求めるのは、他の地域と同様に家族の健康や平安、発展である。現在でも人々は、朔望だけでなく日常的にも家族の出来事に対して竈神に祈願し報告している。竈神が民間信仰の神であることは、キリスト教徒の女性が竈神を信じる理由について、昔からベトナムの人々が信じてきた大事な神であり、祀ることはベトナムの習慣であると述べた言葉にあらわれている。

中南部地域で祀られる竈神は、中国の影響の取捨選択のなかで祭具を取り入れながらベトナムの三柱の竈神を祀り、また一方で亭における竈神の祀り方や竈神への祈願文からは道教的要素や仏教的要素の混在が色濃くみられる。そこには、中南部地域の領土拡大の過程でチャンパやクメールの信仰を取り込み、また中国系移民を受け入れるなかで竈神や土地神、道教的なさまざまな要素を多様に取り入れてきた経緯がある。しかし、そのなかでも三柱を神体とする竈神は信仰され祀られてきた。三柱の竈神がベトナムの民俗において重要な位置を占める信仰であることを示しているといえる。

③フエ地域

ベトナムの最後の王朝がおかれたフエ地域の竈神の特徴は、ベトナムの古い儀礼の形式を継承しつつ、独自の祭具を用いて祀り、儀礼を継続していることである。

古い儀礼の形式の一つは、竈神の神体の新旧交換である。北部地域や中南部地域でも文献資料や聞き取りによると1980年代まで行なわれていたことが確認できる。もう一つは男性の本命神として先師・土公・竈神を祀ることである。18世紀や20世紀初めの資料によると、北部地域では以前これら三つの神が家の神として祀られていたことが記されている。しかし、現在ではフエ地域で祀られるのみである。これらの信仰や儀礼の形式は、領土拡大のための南進政策の過程で北部からフエ地域に持ち込まれたものである。その後、他の地域では時代や社会の変動のなかで失われていったものが、フエ地域では現在に至るまで継承されているのである。

一方でフエ地域独自のものとして、一つは農村であるシン村で製作されている竈神の儀礼版画である。竈神の儀礼に版画が用いられることは、北部地域、さらにそのもとをたどれば中国の影響が考えられるが、フエ地域の特徴はその版画に描かれたモチーフにある。自分たちの豊かな暮らしへの願望が版画全体に詰め込まれているのである。これは、北部地域のドンホー版画やオジェ編纂の版画には描かれていない。そして、そこには五穀豊穡や家畜の繁殖だけでなく、建築物としての家を含めた物質的な豊かさへの憧れも描かれている。この版画のモチーフや配置から、農村であるシン村が交易によっても栄えていたこと、そしてフエ王宮の影響をうかがうことができる。

二つ目は竈神の神像である。もともとはフエ地域も土製支脚が竈神の神体であった。その土製支脚を象った小型の神像がはじめに作られ、現在は竈神三柱を象った神像が主流になっている。生活形態が変わるなかで神像を新たに作り出した背景には、竈神の儀礼を正しく行なうことを重視してきた暮らし方が関係している。神像は、三柱を起源とする竈神の儀礼を継承するために、神体の新旧交換を継続するために独自に展開されたといえる。すなわち、竈神の神像は物理的な機能を兼ね備えたものから象徴的な機能へと移行した、神体(=「モノ」)であるといえることができる。

また、フエ地域には1909年に翁寺(Chùa Ông 関帝廟)で刻印された「竈王真経」が残されている。朝廷の役人が王宮の儀礼で使用する経典の版木を翁寺に作らせたものであり、それが民間にも流通している。フエ地域の民間の竈神儀礼には、経典と朝廷の儀礼が習合されていたとみることができる。

フエ地域は、悪地とも記されたほどの土地であり、厳しい生活環境のもと北部地域の古い儀礼の形式を継承しつつ、征服したチャンパの神を取り入れるとともに、崇りを恐れてチャム人を祀ってきた。また、17世紀末から移入した中国系移民の影響や19世紀初頭に王都がおかれたことも竈神を祀る儀礼に影響を与え、いくつもの要素が融合されてきた。こうした多層的なフエ地域の歴史的な背景が、竈神の信仰と儀礼に独自の形態を作り上げたといえる。そして厳しい生活環境は、自分たちの暮らす土地に関わる先住民や先住者、孤魂、戦死者などに対する畏怖の念を強くし、それはまた、人々の竈神に対する観念にもつながっている。屋内にいて家族を保護する最も重要な竈神は、基本的には優しい神である。その反面、正しく祀らなければ家族に災いを起こす恐ろしい神となる両義性を持って存在する。しかし、この非常に恐ろしい神は味方につければ強大な力を持って保護する神となる。だからこそ人々は大切な子どもの命を竈神に預ける儀礼をしてきたのであろう。竈神は家族の命を司る役割も担った非常に力を持

った神であるということが出来る。

また、中国系移民からの影響の取捨選択の仕方を見ると、同じ中南部地域とは異なり、フエ地域では神体や祭具に中国の影響はみられない。それはフエ地域に朝廷がおかれたことが関係しているのであろう。民間の人々が行なう儀礼は、王宮の儀礼の日時に従い、供物などはより控えめに、そして正しく行なうことを心がけていたということが影響していると考えられる。

以上、ベトナムの竈神の地域性と人々の観念を述べてきた。外面的には中国の竈神や信仰の影響を受容したように見えるベトナムの竈神は、実際には名称や儀礼の行動様式、「物」としての祭具などを、時代や地域の歴史のなかで取捨選択しながら、またチャンパやクメールなど他の民族の影響を受けながら自分たちの土着の炉の神、土製支脚を神体とする三柱の信仰に包摂してきたということが出来る。

ベトナムの歴史のなかで、炉と土製支脚は家族の生活に必要な不可欠な、煮炊きや火の利用の場として長くそして深く家族の暮らしと結びついてきた。竈神はそのなかで信仰されてきた。だからこそ、土製支脚を神とする男神二柱と女神一柱の三柱は、歴史的変遷のなかでも変わることなく継承されてきたのである。一方で祀り方は、歴史的事象や社会、経済の発展に伴い台所の構造や暮らし方が変わるなかで、自分たちの生活や社会に適した方法を取り入れてきた。それは三柱の竈神を信仰し祀り続けるために、それぞれの地域で、その歴史や環境に適応させてきたからであり、そのことが多様な祀り方を作り出してきた。そこに共通するのは、ベトナムの人々の竈神に対する観念、竈神が強大な力を持った家族の守護神であるということである。

ベトナムの竈神とは、長く家の中心であった土製支脚を神体とした炉の信仰を基層として、さまざまな影響を取捨選択し習合させた家族を守護する家の神であるといえる。

(4) ベトナムの民間信仰における竈神の位置付けと家の神

ベトナムの地域性や共通性から竈神三柱について明らかにしてきた。次は家の神である竈神のベトナムの民間信仰における位置付けと、竈神を祀ることからみたベトナムの家の神について述べたい。まず、ベトナムの家で祀られる神と儀礼を行なう空間について整理をする。

屋内では、主屋の中央に基本的には祖先の祭壇が置かれている。北部地域では、そこで祖先だけでなく竈神やさまざまな神が神霊として一緒に祀られ、仏陀なども香炉を神体として祀られている。祖先の祭壇がない場合は、神霊を祀る祭壇が作られている。中南部地域の家では主屋の中央に観音の祭壇が置かれていることも多い。その場合は、その奥（後方）に祖先の祭壇が置かれる。また、祖先の位牌はなく家族や幼くして亡くなった自分の子どもの位牌を祀っている家もある。中南部地域では祖先の祭壇がない家も多い。その場合でも北部地域のような神霊の祭壇は設置されない。

また、主に商売をしている家や店などは屋内に財神（タンタイ *Thần Tài*）と土地神（トーディア *Thổ Địa* またはオンディア *ông Địa*）の二体の神を一つのセットとして地面の上で祀っている。この土地神は北部地域の土公とは異なり、また竈神との混淆もされていない。その他に中国系移民の家では関羽などさまざまな神が祀られているが、キン族の家ではそれらの神が祀られているのはほとんどない。

そして、ベトナム全土でキリスト教など特定の宗教を信仰する場合を除き、どこの家でも屋内で祀られているのが竈神である。北部地域では祖先の祭壇で、中南部地域では台所空間に作

られた竈神の祭壇で祀られている。中南部地域では、たとえ祖先などの祭壇がなくても竈神の祭壇は置かれている。祭壇はなくても信仰し儀礼は台所で行なわれる。フエ地域では竈神以外に家主とその妻をそれぞれ守る本命神が屋内で祀られるが、家族全体を守る役割は竈神である。ベトナム・キン族の家の屋内で祀られる神のなかで家族を保護する役割は、竈神以外にはない。

次に家の敷地内（屋外）で祀られる神をみていく。家によって、井戸や門などに線香を供えている。敷地内で多くみられるのは、アム（庵）で祀られる前主（その土地に住んでいた先住民、先住者）である。ハノイの都市部など庭がない家では、屋根や屋上のベランダにアムが作られることもある。フエ地域では屋外に一つから複数のアムが建てられている。祀られる神も多様で前主や孤魂、婆姑、戦死者など、家族によって異なる。南部地域では天を祀るアムが建てられている。

また、家の敷地を保護する土地の神は、北部地域では土公である。現在は屋内の祖先の祭壇で祀られているが、本来は家の敷地の土地を守る神として、悪霊が門のなかに入るのを防ぐ役割を担っている。フエ地域では、土神儀礼が敷地のなかで行なわれる。これは土地に関わるさまざまな神霊や霊魂、全てに対する儀礼である。

屋外で祀られ、また祭壇を設置して行なう儀礼は、地域により違いはあるものの共通しているのは、土地にまつわる霊魂や神霊を祀ることである。フエ地域では、孤魂も戦死者も敷地のなかで亡くなった霊魂やバーコー（婆姑）もアムを建てて祀っている。それにより自分たちの敷地の土地を守り、悪霊の侵入を防ぎ、災いを回避するためである。ベトナムの人々は、死者の霊魂、特に自分たち家族の暮らす土地にもともといた住人の霊魂や土地にまつわる霊魂、孤魂に対する恐れがある。何か問題があれば家族への災いの原因となると考えている。そのため、それらの霊魂を祀ることでその力を保護神へと変えているのである。

儀礼を行なう空間をみていくと、屋内と屋外の他にもう一つ、家の敷地の外（門の外）でも儀礼が行なわれている。フエ地域の事例では、フランス侵攻によるフエ陥落、失守京都による死者を祀る孤魂儀礼は門の外に祭壇が置かれる。また、毎月の朔望に歩道などに祭壇を設けて孤魂を祀っているが、これは南部地域でも同様の事例がある。敷地の外に浮遊する孤魂に対する儀礼は門の外で行なわれている。

以上のように、家レベルで祀られる神と儀礼の空間をみていくと、現在、民間信仰の儀礼は三つの空間に区分されている。敷地の外（門の外）、屋外、そして、屋内である。

屋内は、家族の暮らしと最も密接に関わる空間であり、長い間その生活の中心には炉と土製支脚があった。そこで祀られる竈神は、煮炊きや火の管理だけでなく、家族の健康や幸福、仕事や学業など全般を見守る神であり、以前は幼児の命の保護という司命神の役割も担っていた。強大な力をもつ神を正しく祀るため、台所や竈神の位置や方位は重視され、新居に竈神を入れる日は選日されてきた。台所の形態が変わるなかで祀り方も変わっているが、竈神を祀ることは継承されている。ベトナムでは現在も家族を守護する神は竈神のほかにはない。こうしたことから竈神は、屋内で祀られる家の神、すなわち民間信仰における「屋内神」として位置付けることができる。

そして、竈神の信仰と儀礼からみたベトナムの民間信仰における家の神は、「屋内神としての

竈神」と「屋外神としての土地神」から成り立っているということができる。

家レベルの民間信仰を儀礼の空間からみると前述したように三つの空間に区分できる。そして、家の神が祀られるのは「屋外」と「屋内」の二つの空間である。屋内で祀られる神は非常に少なく限定されているのに対して、屋外では地域差はあるが基本は自分たちの土地に関わる神霊や靈魂が祀られている。特にフエ地域では、屋内で祀ることのできないバーコー（婆姑）などが屋外に建てられたアムで祀られている。屋外で祀られる神や靈魂からベトナム人の神観念の様相の一端をみることができる。そして、このことから屋内と屋外では祀られる神霊や靈魂の区別があることがわかる。屋外で祀られる前主などの靈魂は、最初から家族を保護する役割を持った神ではない。鎮魂のために祀り儀礼を行なうことで家族に降りかかる災いを回避し、またその力を保護神に変えているのである。

以上からベトナムの民間信仰における家の神は大きく二つ、「屋内神としての竈神」と「屋外神としての土地神」に分けられ、この屋外神と屋内神によって家族や家が守護され、ベトナムの人々はさらなる繁栄や発展を祈念するということができる。

そして、このようなベトナムの民間信仰の家の神からみても、竈神は非常に重要な神であるといえる。

最後に、21世紀の新たな竈神の変化について簡単に触れておきたい。21世紀に入り、毎年大晦日に竈神を神官としたコメディ劇が放映される。1年間のベトナムで起きた出来事や問題を竈神が天帝に報告するという風刺劇であり、人気を博している。多方面からの研究や分析が可能であるが、ここでは民俗学的視点から述べてみたい。家族が集合し祖先や神々を迎える儀礼が行なわれる大晦日の夜に、3人の竈神を主役とする番組が受け入れられるのは、ベトナムにおいて竈神が人々から親しまれた民間信仰の神として広く認知されているためといえよう。一方で、全国放送されるメディアの影響もでている。北部地域の特徴であった竈神の乗り物である鯉の放生は、テレビ放映やインターネットの影響により全国に広がり、近年では南部地域ホーチミンでも鯉を放生する様子が報道で取り上げられ、またフエ地域の若い学生は、竈神の乗り物は鯉だと答えるようになってきている。多様な地域性を持った竈神がどのように変わっていくのか、テレビ放映やインターネットの影響ともあわせて、今後さらに生活や社会が変わるなかで注意していきたい。

第2節 今後の課題

本研究は、東アジアにベトナムを位置付け、民間信仰の視角からベトナムの竈神について考察を試みてきた。しかし、本研究で言及できなかった点がいくつかある。そのなかでも重要な課題について以下に述べたい。

その一つは、竈神と火との関係である。昔話でも3人が火のなかで死亡して竈神となるように、火が非常に重要な要素として記されている。また、土製支脚の土と火の関係性や木の根元に神像を置く見送り儀礼などから、竈と火の関係には特に中国の風水思想や八卦などの影響が考えられる。

二つ目は、中国の竈神の影響がどのようにベトナム北部地域に伝わり、そこから民間の人々が祀るようになる過程にはどのような人が関わっているかという問題である。また現在、竈神

を祀るなかに介在する宗教者や宗教職能者に関する研究も必要である。具体的には一つの手がかりとして、北部地域タイビン省のミーアム集落でタイケンと呼ばれる宗教職能者が竈神を祀ることに関与する事例を調査していくことを考えている。

三つ目として、本研究ではベトナムの家の神のなかの「屋内神としての竈神」を中心に論じてきた。今後は屋外で祀られる神について、土地神やアムで祀られる前主や孤魂などの調査を行ない、屋内神と屋外神の全体からベトナムの家の神についての研究を進めていきたい。

最後に、東アジアとの比較研究について今回は、昔話の比較をわずかに取り上げることしかできなかった。しかし、東アジアにベトナムを位置付けた比較研究は重要であり、比較研究の可能性は大きいと考えている。中国と中国の周縁地域である沖縄とベトナムの竈神の中国の影響の取捨選択や習合の仕方などの比較研究、また、日本とベトナムの比較研究では竈神と土公の習合についてもみていくことが可能である。また、ベトナムは多くの少数民族が暮らす多民族国家であり、民族や生業と竈神の関わり、関連する東南アジア地域の竈神信仰などにも目を向けた研究も今後の課題としたい。

参考文献

(ベトナム語)

- Alexandre De Rhodes (biên dịch : Thanh Lăng, Hoàng Xuân Việt, Đỗ Quang Chính) 1991(1651) *Từ điển Annam-Lusitan-Latinh* (Thường gọi từ điển Việt - Bồ - La), Nhà xuất bản Khoa học xã hội, Hà Nội
- Bento Thiện 1659 “Lịch sử Nước Annam” Đỗ Quang Chính, Sj 2008 (1972) *Lịch Sử Chữ Quốc Ngữ 1620-1659*, Nhà xuất bản Tôn Giáo : 176
- Cadière, Leopold 1996(1933) *La Citadelle de Hué : Onomastique Kinh Thành Hué Địa Danh*, Bulletin des amis du vieux Hué-1933, Nhà xuất bản Đà Nẵng-1996
- Cadière, Leopold (Bản dịch: Đỗ Trinh Huệ) 2015 Văn hóa tín ngưỡng và thực hành tôn giáo người Việt (Trọn bộ 3 tập) Nhà xuất bản Thuận Hóa
- Cadière, Leopold 1918 *Croyances et Pratiques Religieuses des Annamites dans les Environs de Hué* Bulletin de l'Ecole Française d'Extrême-Orient, XVIII,7 Hà Nội, 1919:1-60
- Chu Húc Cường 2013 “Tín ngưỡng thờ Táo Quân ở Việt Nam từ góc độ khảo sát thư tịch học” Hội Folklore Châu Á trung tâm nghiên cứu và bảo tồn văn hóa tín ngưỡng Việt Nam, Văn hóa thờ Nữ Thần-Mẫu ở Việt Nam và Châu Á bản sắc và Giá trị, Nhà xuất bản Thế giới : 308-325
- Cuisinier, Jeanne 1995(1948) *Người Mườn Địa lý nhân văn và Xã hội học*, Nhà xuất bản Bản Lao Động Cửu Long Giang, Toan Ánh 1967 *Người Việt Đất Việt*, Nam-chi Tùng-thư, Saigon
- Đặng Văn Lung, Nguyễn Sông Thao, Hoàng Văn Trụ 1997 *Phong tục tập quán các dân tộc Việt Nam*, Nhà xuất bản văn hóa dân tộc
- Đào Duy Anh 2002(1938) *Việt Nam Văn hóa sử cương*, Nhà xuất bản Văn Hóa-Thông Tin Hà Nội
- Đình Hồng Hải 2015 “Thần Bếp” những biểu tượng đặc trưng trong văn hóa truyền thống Việt Nam tập 2 Các vị thần, Nhà xuất bản Thế giới, Hà Nội : 51-90
- Đỗ Quang Chính 2008 (1972) *Lịch sử chữ quốc ngữ 1620-1659*, Nhà xuất bản Tôn Giáo
- Đoàn Triển 2008(1908) *An Nam Phong Tục Sách 安南風俗冊*, Nhà xuất bản Hà Nội
- Huỳnh Đình Kết 1998 *Tục thờ thần ở Hué*, Nhà xuất bản Thuận Hóa, Hué
- Huỳnh Đình Kết 2001 *Tranh Làng Sinh trong đời sống tín ngưỡng dân gian Hué*, Nhà xuất bản Hué
- Huỳnh Ngọc Trảng 2003 “ông Táo về trời” Tạp chí Kiên thực ngày nay số Xuân, số555, :45-49
- Huỳnh Ngọc Trảng, Trương Ngọc Tường, Hồ Tường 1993 *Đình Nam bộ, tín ngưỡng và nghi lễ*, Nhà xuất bản Thành phố Hồ Chí Minh.
- Huỳnh Ngọc Trảng, Trương Ngọc Tường, Hồ Tường 1994 *Văn hóa dân gian cổ truyền Ông Địa tín ngưỡng và tranh tượng* Nhà xuất bản Thành phố Hồ Chí Minh.
- Huỳnh Ngọc Trảng, Nguyễn Đại Phúc 2013 “Chương II :Táo Quân- Nhất Gia Chi Chủ” *Đặc khảo về tín ngưỡng thờ gia thần*, Nhà xuất bản Văn hóa văn nghệ : 35-56
- H.V.V 1948 “Cúng Ông Táo (Ngày 23 tháng chạp âm-lịch)”, *Dân Việt Nam Le Peuple Vietnamien*, Nhà xuất bản Viện Đông- Phương Bắc-Cô Edite par L'Ecole Française d' Extrême-Orient:37-38
- Lê Trung Vũ 2003 *Tết cổ truyền của người Việt*, Nhà xuất bản Văn Hóa-Thông Tin
- Nguyễn Bá Vân và Chu Quang Trứ 1984 *Tranh dân gian Việt Nam*, Nhà xuất bản Văn Hóa.
- Nguyễn Đồng Chi 1956 *Lược khảo về thần thoại Việt-Nam*, ban nghiên cứu văn sử địa:117-120
- Nguyễn Đồng Chi 1974 *Kho tàng tuyển cổ tích Viet Nam Tập 1*, Nhà xuất bản Khoa Học Xã Hội Hà Nội

- Nguyễn Xuân Kinh 2006 “Cái bếp và tục thờ thổ công của Người Việt”, *Nguồn sáng Dân Gian* số 4(21):80-85
- Nguyễn Xuân Kinh 2013 “Cái bếp của Người Việt”, *Con người, môi trường và Văn Hóa*, Nhà xuất bản Khoa học xã hội : 137-150
- Nishimura Masanari, Nhishino Noriko, Trịnh Hoàng Hiệp, Hán Văn Khản Mô hình cư trú của làng cổ ở Đòng bằng sông Hồng qua tư liệu khảo cổ học ở làng Bánh Cốc và xung quanh : 127-143.
- Oger, Henri 2009(1909)*Technique du peuple Annamite, Mechanics and crafts of the Annamites, Kỹ thuật của người An Nam I II III*, Nhà xuất bản Thế giới
- Phan Kế Bính 2011 (1915) *Việt Nam phong tục*, Nhà xuất bản Văn Học
- Tavernier, Jean Baptiste (dịch; Lê Tư Lành) 2011(1681) “Chương XV Tôn giáo và những tục mê tín dị đoan của người dân Đàng Ngoài”, *Tập Du Ký Mới Và Kỳ Thù Về Vuiwbg Quốc Đàng Ngoài*, Nhà xuất bản Thế giới
- Toan Ánh 1997(1967) *Nếp cũ Tín ngưỡng Việt Nam*, Nhà xuất bản Thành phố Hồ Chí Minh
- Trần Đại Vinh 1995 *Tín ngưỡng dân gian Huế*, Nhà xuất bản Thuận Hóa, Huế
- Trần Ngọc Thêm 1999 *Cơ sở văn hóa Việt Nam*, Nhà xuất bản Giáo Dục:138-153
- Trần Quốc Vượng, Đỗ Thị Hào 2014 *Nghề Thủ công truyền thống Việt Nam và các vị tổ nghề*, Nhà xuất bản Văn hóa thông tin, Hà Nội.
- Trần Thị Lệ Xuân 2010 “Bếp xưa trong di tích ở khu phố cổ Hội An” *Bản Tin của Trung tâm QLBT Di tích*, Nhà xuất bản Trung tâm QLBT Di tích Hội An
- T.V.Tống 1952 “Tết Táo-Quân Triều Thiên” Cha Jacques Cua (giám đốc), Ngo Văn Thanh (chủ nhiệm kiêm Quản lý) *Cần Học* số 28:24-26
- Vũ Bằng 2006 “Tháng Chạp nhớ ơi chợ Tết” *Thượng nhớ mười hai*, Nhà xuất bản Văn Hóa Thông Tin:248-281
- Vũ Tam Lang 1988 *Kiến trúc cổ Việt Nam*, Nhà xuất bản Xây Dựng, Hà Nội

(英語)

- Adriano di St. Thecla (Olga Dror translator and annotator) 2002(1750) *Opusculum de Sectis Apud Sinense et Funkinenses (A Small Treatise on the Sects among the Chinese and Tonkinese): A Study of Religion in China and North Vietnam in the Eighteen Century*, Southeast Asia Program Publications Southeast Asia Program Cornell University Ithaca, New York
- Hickey, Gurald Cannon 1964 *Village in Vietnam*, New Haven: Yale University Press.
- Patrick Mcallister and Thi Cam Tu Luckman 2015 “The Kitchen God Returns to Heaven [Ông Táo Về Trời]: Popular Culture, Social Knowledge and Folk Beliefs in Vietnam” *Journal of Vietnamese Studies*, Vol. 10 : 110-150

(フランス語)

- Do Lam Chi Lan 1998 *La mère et l'enfant dans le Viêt-Nam d'autrefois*, L'Harmattan, Paris-Montresal.
- Stein, R.A 1970 “La legend du foyer dans le monde chinois”, *Echanges et communications*, Mouton the Hague, Paris, pp1280-1305
- Huard, Pierre et Durand, Maurice 1954 *Connaissance du Viêt-Nam*, Paris Imprimerie Nationale, Ecole Francaise D'extreme-Orient Hanoi.

(漢文)

- 『安南志原』卷第2. 永樂17年(1419) 河内法國遠東學院訂刊 1931
- 『安南志略』卷1. 黎崱撰、至元6年()
- 『安南即事詩』『陳剛中詩集』陳孚、至元30年(1293)
- 『烏州近録』楊文安、莫朝景曆6年(1553)、漢喃研究院、NXB Khoa Học xã hội, Hà Nội 1997
- 『越甸幽靈集』李濟川撰、開祐元年(1329)、越南漢文小説叢刊第二輯、台湾学生書房、1992
- 『越南開国志伝』卷1、阮科占、永盛15年(1719)、『第四册越南漢文小説叢刊』台湾学生書局、台北、1986
- 『嘉定通志』卷3、鄭懷德、明命元年(1820)
- 『強暴大王』『公餘捷記』卷2、景興15年(1755)
- 『欽定大南會典事例』卷93. 阮朝内閣刊本、嗣德8年(1855)
- 『灶君經』維新3年(1909)
- 『乩正竈神經文』河内劍湖玉山祠藏版、成泰18年(1906)
- 『大南一統志』阮朝官撰、嗣德35年(1882)維新三年序刊本
- 『東厨司命燈儀 二燈儀同卷』『洞真部 威儀類 爲上』『道藏』上海涵芬樓影印
- 『平居常用節要全書』黎朝保泰4年(1724)
- 『撫辺雜録』卷3、黎貴惇、Phù quốc-vụ-khanh Đắc-tránh Văn hóa xuất bản 1972, Tủ sách cổ văn Ủy ban dịch thuật
- 『嶺南摭怪列伝』武瓊序、洪德23年(1492)、越南漢文小説叢刊第二輯、台湾学生書房、1992
- 『歷朝憲章類誌』卷25. 潘輝注、明命2年(1821)

- 徐方宇 2006「漢族、越族民間灶神信仰之比較研究」『東南亞研究』2006年第3期
- 王小盾・劉春銀・陳儀 2002『越南漢喃文獻目錄提要』中央研究院中國文哲研究所
- 浙江民俗學會編 1986「第二章生產習俗」『浙江風俗簡誌』浙江人民出版社：292-293
- 丁世良 趙放主編 1991『中國地方志民俗資料匯編』中南卷下 北京圖書館出版社(原書目文獻出版社) 804
- 朱旭強 2013「越南灶神信仰傳統的文獻學考察」『域外漢籍研究集刊』第8輯北京 中華書局：247-259

(日本語)

- 阿部百里子 2002「ファン・チュウ・チン 69/5 地点の発掘調査」『ベトナム・ホイアン地域の考古学的研究』昭和女子大学国際文化研究所紀要 Vol.8 : 59-112
- 飯倉照平 1991「中国のかまど神をめぐる物語」『昔話伝説研究』第16号 : 42-55
- 飯島吉晴 1978「竈神の象徴性」『民族学研究』42巻4号 : 312-333
- 飯島吉晴 1986『竈神と廁神—異界と此の世の境』人文書院
- 飯島吉晴 2018「荒神信仰と竈神」『季刊 悠久』第155号 おうふう : 16-39
- 石井米雄・桜井由躬雄編 1999『東南アジア史 I 大陸部』山川出版
- 伊藤清司 1991「炭焼長者の構造と系譜」『昔話伝説の系譜』第一書房 : 161-201
- 伊藤清司 1999「ベトナムの炭焼の話」『国文学 解釈と教材の研究』12月号第44巻14号学燈社 : 6-11
- 伊藤清司 2003「民間説話の伝播と変容」『国立歴史民俗博物館研究報告』第106集 国立歴史民俗博物館 : 13-21

- 伊藤清司 2007a 「炭焼長者の話 搬運神」『比較民俗研究』21 筑波大学比較民族研究会 :1-34
- 伊藤清司 2007b 「炭焼き長者の話 -柳田國男と松本信廣-」『史学』75 慶応義塾大学 :211-231
- 稲畑耕一郎 1994 「司命」野口鐵郎他編集『道教事典』平河出版社 :236-237
- 今井昭夫 1993 「ベトナムの宗教の現状」『月刊しにか』7月号大修館書店 :82-86
- 今井昭夫 1997 「ベトナムの言語と文化 —クオックグーの発展とナショナリズム—」小野沢純編者
『ASEANの言語と文化』高文堂出版社 :197-235
- 今井昭夫 2004 「現代ベトナムにおける宗教政策 -2004年「信仰・宗教法令」を中心に」『東京外国語大学論集』69号 :157-172
- 今井昭夫 2012 「「宗教」と「信仰」-公認されている宗教と非公認の宗教-」『現代ベトナムを知るための60章』第2版 明石書店 :194-198
- 今村啓爾 1999 「ドンソン文化」『ベトナムの事典』同朋社 :247
- 伊波普猷 1974 「火の神考」「あまみや考」『伊波普猷全集』第5巻 平凡社
- 伊波普猷 2000 『古琉球』岩波文庫
- 岩井美佐紀 1997 「ドンホー版画」『月刊しにか』8月号 大修館書店 :72-73
- 上江洲敏夫 1976 「沖縄における火の神信仰の史的考察—特に火の神の出自をめぐる—」
『立正大学『文学部』論叢』第55号立正大学文学部
- 宇野公一郎 1994 「ベトナムの道教」『別冊歴史読本 特別増刊37「道教」の大事典』新人物往来社 :382-387
- 宇野公一郎 1999 「ムオン・ドンの系譜 —ベトナム北部のムオン族の領主家の家譜の分析」『東京女子大学紀要論集』49(2) 東京女子大学 :137-198
- 宇野公一郎 2000 「ムオン」『世界民族事典』弘文堂 :673
- 宇野公一郎 2004 「ベトナム朝廷による神界の管理について」『東京女子大学紀要論集』54(2) 東京女子大学 :107-120
- 梅原末治 1944 「安南清化省東山出土の土製支脚」『人類学雑誌』第59巻第3号 日本人類学会 :75-78
- 大泉さやか 2015 「社会主義ベトナムにおけるフォークロアの収集・研究と文化政策」『東南アジア研究』52号2号 京都大学 :235-266
- 大島建彦 2003 『民俗信仰の神々』三弥井書店
- 大藤時彦 1940 「カマドとイロリ」『人類学雑誌』第55号 :25-29
- 大藤時彦 1944 「家の神としての火の神」『民間伝承』第10巻第6号 :14-19
- 大西和彦 1995 「宗教と儀礼」桜井編『もっと知りたいベトナム2版』弘文堂 :219-238
- 大西和彦 2002 「ベトナムの正月行事と民間信仰」『アジア遊学』No46 勉誠出版 :96-104
- 大西和彦 2003 「トゥアティエン・フエ省ティンフォック村諸族所蔵族譜・家譜中の道教関係記事初探」『ベトナムの社会と文化』 :110-139
- 大西和彦 2006 「ベトナムの雷神信仰と道教」『国立民族学博物館調査報告』63号 国立民族学博物館 :85-107
- 大西和彦 2009 「数の概念—微妙な奇数と安心の偶数—」『Vina Boo』11月 vol.30 :14
- 大西和彦 2011a 「ベトナムのカマド神」『Vina Boo』1月 Vol.44 :16-17
- 大西和彦 2011b 「ベトナムの猫年」『Vina Boo』2月 Vol.45 :16-17
- 大西和彦 2011c 「ベトナムにおける岳府信仰形成の一考察」『東アジア山岳文化研究の新地平』慶尚大学校、晋州市 :127-144

- 大西和彦 2012 a 『竈神真経』 解題 『周縁の文化交渉学シリーズ7 フェ地域の歴史と文化-周辺集落と外からの視点』 関西大学文化交渉学教育研究拠点 : 399-405
- 大西和彦 2012 b 「フェ地域の九天玄女信仰について」 『周縁の文化交渉学シリーズ7 フェ地域の歴史と文化-周辺集落と外からの視点』 関西大学文化交渉学教育研究拠点 : 557-577
- 大西和彦 2012 c 「一八世紀ベトナム儒教入門者の道教儀礼」 『東洋文化研究』 14号 学習院大学 : 67-98
- 大西和彦 2012d 「ベトナムの民間信仰」 『現代ベトナムを知るための60章』 第2版 明石書店 : 199-202
- 大西和彦 2013 「カマド神信仰に見るベトナム女性商人の活躍」 『Vina Boo』 2月 vol.69 : 14
- 大西和彦 2014 「テト古俗 —カイーネウと九天玄女信仰—」 『Vina Boo』 2月 vol.81 : 14
- 大西和彦 2015 「ベトナムのカマド神雑話」 『Vina Boo』 2月 vol.93 : 14
- 大西和彦 2017 「ベトナムの海神四位聖娘信仰と流寓華人」 『シリーズ 日本文学の展望を拓く3 宗教文芸の言説と環境』 笠間書院 : 176-194
- 尾崎正治 1994 「道蔵」 野口鐵郎他編集 『道教事典』 平河出版社 : 455-456
- 小野敦子 1999 「南ベトナム社会の明郷集団」 『ベトナムの社会と文化』 1号 風響社 : 323-341
- 大林太良・今村啓爾・宇野公一郎 1984 「東南アジアの先史文化」 大林編 『東南アジアの民族と歴史』 民族の世界史6 山川出版社 : 79-150
- 岡本弘道 2012 「フェ郊外ディアリン村の形成と主要氏族の変遷-収集資料・文書資料および聞き取り調査を通じて-」 『周縁の文化交渉学シリーズ7 フェ地域の歴史と文化-周辺集落と外からの視点』 関西大学文化交渉学教育研究拠点 : 123-129
- 折口信夫 1972(1923) 「琉球の宗教」 『折口信夫全集』 第二巻 中央公論
- 折口信夫 1973(1947) 「女の香炉」 『折口信夫全集』 第十六巻 中央公論
- 神崎宣武 1989 「台所の文明と文化-「火」を中心にして」 『家庭の食事空間』 ドメス出版 : 35-47
- 神崎宣武 1999 「台所の原風景-「火」の神と「水」の神」 山口昌伴責任編集 『家庭の食事空間 講座食の文化 第4巻』 味の素食の文化センター : 44-63
- グエン・ヴァン・ダン (Nguyễn Văn Đăng) (新江利彦・西村昌也訳) 2012 「1306年から1945年までにおけるトゥアティエン・フェの手工芸」 『周縁の文化交渉学シリーズ7 フェ地域の歴史と文化-周辺集落と外からの視点』 関西大学文化交渉学教育研究拠点 : 481-495
- Nguyễn Thị Oanh 2011 「ベトナムの漢文説話における鬼神譚について巡る-『今昔物語集』との比較」 <http://khoavanhoc-ngonngu.edu.vn>
- グエン・ティ・オワイン (Nguyễn Thị Oanh) 2012 「ベトナムの慣習と信仰を古典文学に探る」 第252回日研フォーラム : 1-20
- グエン・ティ・タイン・ハー 2017 「在ベトナム中国系住民「明郷」の歴史認識-ベトナム・ホイアンにおける「明郷」の家譜・族譜の分析から-」 『アジア社会文化研究』 18号 : 113-146
- 菊池誠一・菊川泉 1997 「ファンチャーチン129」 『ベトナムの日本町ホイアンの考古学調査』 昭和女子大学国際文化研究所紀要 Vol.4 : 133-144
- 菊池誠一 2002 「第2章ホイアンの位置と歴史的環境」 『ベトナム・ホイアン地域の考古学的研究』 昭和女子大学国際文化研究所紀要 Vol.8 : 7-10
- 菊池誠一 2010 「日本出土ベトナム陶器の生産地-フェ・フックティック窯業村の調査-」 今村啓爾編 『南海を巡る考古学』 同成社 : 183-201

- 菊池誠一 2011「フォックティック村とその歴史」『ベトナム社会主義共和国トゥアティエン・フエ省 フォックティック村集落調査報告書』奈良文化財研究所: 5-8
- 菊池誠一 訳・解説 2012「ベトナムの考古文化(6)-青銅器時代初期(フングエン文化)-」『学苑』No.857 昭和女子大学: 56-70
- 菊池誠一・小野田恵 2011「第7章フォックティック村における考古学調査」『ベトナム社会主義共和国 トゥアティエン・フエ省 フォックティック村集落調査報告書』 奈良文化財研究所: 136-143
- 窪徳忠 1983『新版道教百話』世界聖典刊行協会
- 窪徳忠 1987『道教の世界』学生社
- 窪徳忠 1990『目で見ると沖縄の民俗とそのルーツ』沖縄出版
- 窪徳忠 1996『道教の神々』講談社
- 窪徳忠 1997『沖縄の習俗と信仰』第一書房
- 川上崇 2001「ベトナム社会主義革命のなかの手工芸村 紅河デルタにおける木版印刷業の歴史的展開」『ベトナムの社会と文化』第3号 風響社: 49-79
- 川本邦衛編 2011『詳解ベトナム語辞典』大修館書店
- 小林行雄 1941「土製支脚」『考古学雑誌』31(5): 276-298
- 桜井由躬雄 1987『ベトナム村落の形成-村落共有田=コンディエン制の史的展開』創文社
- 桜井徳太郎 1990『民間信仰の研究 下』桜井徳太郎著作集 第4巻 吉川弘文館
- 佐々木喜善 1976(1922)『江刺郡昔話』郷土研究社
- 佐野愛子 2015「『粤甸幽霊集録』における神-モンゴルの侵略を通して」立教大学日本学研究所年報 13: 29-38
- 佐野賢治 1998「比較民俗研究の一視角-固有信仰論から民族宗教論へ-」『日中文化研究』勉誠出版: 56-66
- 佐野賢治 2002「もの・モノ・物の世界-序にかえて」印南敏秀他編『もの・モノ・物の世界-新たな日本文化論』雄山閣: 1-7
- 澤田瑞穂 1982「民間信仰と道教-昭和52年11月26日、第一回道教談話会口述」『中国の民間信仰』工作舎: 8-12
- 澤田瑞穂 1994「泰山」野口鐵郎他編集『道教事典』平河出版社: 365-366
- 昭和女子大学国際文化研究所紀要 1997『ベトナム・ホイアン考古学調査報告書』Vol.4
- 昭和女子大学国際文化研究所紀要 2002『ベトナム・ホイアン地域の考古学的研究』Vol.8
- 昭和女子大学国際文化研究所紀要 2006『ハタイ省ドゥオンラム村 集落調査報告書』Vol.11
- 末成道男 2000「北部ベトナムの〈土地神〉: 華南漢族との比較」『ベトナムの社会と文化』第2号 風響社: 64-85
- 末成道男 2002「中部ベトナムにおけるアム(庵)の素性」『東洋大学アジア・アフリカ研究所「研究年報」』第37号: 40-52
- 末成道男 2005「ベトナムにおける〈土地神〉の変容のきざし-南から北へ-」『民俗文化の再生と創造』風響社: 167-182
- 末成道男 2012a「中部ベトナムにおける草の根レベルの佛教 清福村の事例を中心に」『周縁の文化交渉学シリーズ7 フェ地域の歴史と文化-周辺集落と外からの視点』関西大学文化交渉学教育研究拠点: 579-599

- 末成道男 2012b 「キン族から見た明郷（ミンフォン）の特徴-隣接村地霊における宗教儀礼の比較より-」『周縁の文化交渉学シリーズ7 フェ地域の歴史と文化-周辺集落と外からの視点』関西大学文化交渉学教育研究拠点：237-248
- 末成道男 2012c 「キン族村清福から見た明郷天后宮」『周縁の文化交渉学シリーズ7 フェ地域の歴史と文化-周辺集落と外からの視点』関西大学文化交渉学教育研究拠点：219-235
- 菅野賢治 2004 「失われた自己イメージの回復-アンリ・オジェ編纂によるベトナム版画集(1908-1909)の復刻-」『人文研紀要』第52号 中央大学人文科学研究所：245-273
- 杉井建 2007 「竈」『東アジア考古学辞典』東京堂出版：101-102
- 鈴木正崇 2008 「方位観」『沖縄民俗辞典』吉川弘文館：461-462
- 関敬吾 1978 『日本昔話大成 第3巻 本格昔話二』角川書店
- 千野明日香 1994 「炭焼き長者譚と中国の類話」『口承文芸研究』第17号：21-28
- 竹田龍児 1975 「阮朝初期の清との関係（1802-1870年）」山本達郎編『ベトナム中国関係史 曲氏の抬頭から清仏戦争まで』山川出版社 493-550
- 田所政江 2000 『くらしの造形11 祈りと願いのコスモロジー-ベトナムの民間画-』武蔵野美術大学美術資料図書館
- 田所政江 2008 『ベトナム民間版画』里文出版
- 田村克己 1997 「ヴィエトナムにおける民間宗教の特色」『東アジアの現在』風響社：47-53
- 張麗山 2014 「東アジアにおける土公信仰と文化交渉」関西大学学位審査論文 関西大学大学院東アジア文化研究科
- 地理情報収集班 2012 「フォンヴィン社旧外港集落の地理的状況」『周縁の文化交渉学シリーズ7 フェ地域の歴史と文化-周辺集落と外からの視点』関西大学文化交渉学教育研究拠点：61-74
- 津田左右吉 1948 「シナの民間信仰における竈神」『東洋学報』第32巻第2号：127-158
- 坪井洋文 1955 「竈神考」『日本民俗学』第2巻第4号 19-36
- 坪井洋文 1956 「家の神の重層性」『日本民俗学』第3巻第3号：33-45
- 友田博道 南雲一郎 他 2005 「越族伝統住居概観」『ベトナム伝統住居の体系的研究 II-文化財保存の国際協力-』昭和女子大学国際文化研究所紀要 Vol.10:1-45
- 直江広治 1963 「屋内神」和歌森太郎編『美作の民俗』吉川弘文館：239-248
- 中川武 早稲田大学アジア建築研究室 1996 「ベトナムの都市と建築2 フェ」『SD スペースデザイン ベトナム建築大博覧』第378号 鹿島出版会：59-78
- 中川武 中沢信一郎 1996 「フェ阮朝王宮の修復と保存」『SD スペースデザイン ベトナム建築大博覧』第378号 鹿島出版会：134-137
- 中西佑二 1999 「ベトナム南部・ソクチャン省D村における信仰と祭祀」『ベトナムの社会と文化』第1号 風響社：91-116
- 仲松弥秀 1975 『神と村』伝統と現代社
- 鍋田尚子 2012 「ベトナムのオンタオ (Ong Tao) (竈神) 信仰：タイビン省ミーアム集落の事例報告」『沖縄国際大学地域文化論叢』第14号：25-47
- 鍋田尚子 2014 「フェ地域のオンタオをめぐる物質文化-オンタオ神像製作と儀礼-」『東南アジア考古学』34号：59-74
- 鍋田尚子 2015a 「ベトナム・フェ地域のオンタオ崇拜」『沖縄国際大学地域文化論叢』16号：37-64

- 鍋田尚子 2015b 「居住空間からみたベトナムのオンタオ(竈神)祭祀-ホイアンの事例報告-」『比較民俗研究』29号:217-228
- 鍋田尚子 2016a 「版画に描かれたモチーフとオンタオ儀礼-シン村オンタオ版画を中心に-」『非文字資料年報』12号:177-197
- 鍋田尚子 2016b 「シン村の儀礼版画-伝統的版画製作と現在-」『民具マンスリー』49(2)5月号:1-17
- 鍋田尚子 2017 「ベトナム北部地域のオンタオ儀礼 具象から抽象へ—文献資料と調査資料との整理から—」『非文字資料研究』第14号 神奈川大学日本常民文化研究所 非文字資料研究センター:197-224
- 鍋田尚子 2018 「ベトナムの竈神と竈—アンリ・オジェ編集の版画を中心に—」『Global Language & Culture』<http://www.glnc.or.kr/article?num=20180007>
- 奈良文化財研究所 2011 『ベトナム社会主義共和国 トゥアティエン・フエ省 フォックティック村 集落調査報告書』
- 西野範子 2012 「ベトナムにおける考古遺跡発掘調査の活用例:キムラン歴史陶磁器博物館の建設」『金沢大学文化資源学研究』4号:17-24
- 西村昌也 2007 「ヴェトナム集落の形成—ナムディン省バクソック集落と周辺域の考古学調査から—」『東南アジア—歴史と文化—』No.36:36-71
- 西村昌也 2011 『ベトナムの考古・古代学』同成社
- 西村昌也 2012a 「フエ地域研究の発想・枠組み フエ旧外港集落フォンヴィン社と周辺域における他分野フィールド研究から」周縁の文化交渉学シリーズ7 フエ地域の歴史と文化-周辺集落と外からの視点』関西大学文化交渉学教育研究拠点:3-13
- 西村昌也 2012b 「フエ都城北郊域の歴史地理学的研究」周縁の文化交渉学シリーズ7 フエ地域の歴史と文化-周辺集落と外からの視点』関西大学文化交渉学教育研究拠点:15-60
- 西村昌也 2012c 「ディアリンの土器生産業について」周縁の文化交渉学シリーズ7 フエ地域の歴史と文化-周辺集落と外からの視点』関西大学文化交渉学教育研究拠点:281-289
- 西村昌也 2012d 「フエ研究からみたベトナム・東南アジア・東アジア研究における可能性」周縁の文化交渉学シリーズ7 フエ地域の歴史と文化-周辺集落と外からの視点』関西大学文化交渉学教育研究拠点:449-455
- 西村昌也 2012e 「ベトナム形成史における“南”からの視点 考古学・古代学からみた中部ベトナム(チャンパ)と北部南域(タインホア・ゲアン地方)の役割」『周縁の文化交渉学シリーズ6 周縁と中心の概念で読み解く東アジアの「越・韓・琉」-歴史学・考古学研究からの視座』関西大学文化交渉学教育研究拠点:105-141
- 西村昌也 2012f 「北属南進の歴史-圧倒的な存在としての中国・フロンティアとしての中・南部-」『現代ベトナムを知るための60章』第2版 明石書店:28-32
- 蓮田隆志 2013 「ベント・ティエン「アンナン国の歴史」簡紹—情報の流通と保存の観点から」『環東アジア研究センター年報』第8号:1-30
- ピエール・グルー 村野勉(訳) 2014 (1936) 『トンキン・デルタの農民—人文地理学的研究— Pierre Gourou Les paysans du Delta Tonkinois』丸善プラネット
- フィン・ディン・ケット(本多守訳) 2005 「フエの神格祭祀について」『ベトナムの社会と文化』5/6号 風響社 205-217

- 百野裕子 1999「ベトナムにおける竈神信仰」立命館大学文学部卒業論文 未発表
- 福田康男 2005「ベトナム語訳『ムオン族』を読む」『ベトナムの社会と文化』第5/6号 風響社：237-253
- 藤原利一郎 1986『東南アジア史の研究』法蔵館
- 古家信平 1994『火と水の民俗文化誌』吉川弘文館
- 古家信平 1999『台湾漢人社会における民間信仰の研究』東京堂出版
- 古田元夫 1995『ベトナムの世界史 中華世界から東南アジア世界へ』東京大学出版会
- 古田元夫 2015「一つの世界の中のベトナム：『ベトナムの世界史』刊行後20年」『Odysseus:東京大大学院総合文化研究科地域文化研究専攻紀要』19号:1-18
- 堀一郎 1971『民間信仰史の諸問題』未来社
- 松原孝俊 1994「朝鮮の「炭焼長者」系説話の比較研究序説」『口承文芸研究』第17号：39-52
- 松本信廣 1942『印度支那の民族と文化』岩波書店
- 松本信広 1956『日本の神話』至文堂
- 松本信広 1966「東南アジア文化の特質」『世界の文化14 東南アジア』河出書房：49-61
- 松本信広 1969『ベトナム民族小史』岩波新書
- 松本信広 1972「大陸と日本」『日本民俗学』第83号：1-14
- 丸山顕徳 1983『沖縄の民話と世界観』海鳴社
- 丸山顕徳 1993『沖縄民間説話の研究』勉誠社
- 満鉄東亜経済調査局 1939『仏領印度支那に於ける華僑』満鉄東亜経済調査局
- 三尾裕子 1999「漢民族の民間信仰-「中国的宗教」論への一視角」『中原と周辺-人類学的フィールドからの視点』風響社：221-239
- 三尾裕子 2005「中国民間信仰のダイナミズム-道教との関係」『民俗文化の再生と創造 東アジアの沿岸地域の人類学的研究』風響社：213-241
- 三尾裕子 2006「中国系移民の僑居化と土着化-ベトナム・ホイアンの事例から-」『東アジアからの人類学-国家・開発・市民-』風響社：85-102
- 三上陵 2014「ベトナムの民間版画-フエ近郊シン村の紙馬を中心に」『人文学報』No.493 中国文学研究室 首都大学東京 人文科学研究科：23-37
- 宮田登 1982『女の霊力と家の神』人文書院
- 宮家準 1974『日本宗教の構造』慶應通信
- 宮家準 1994『日本の民俗宗教』講談社学術文庫
- 村上呂里 2006「多民族国家ベトナム言語教育の光と影-ベトナム北部山岳少数民族地域をフィールドとして-」『多言語社会における言語教育に関する研究 -ベトナム・タイグエン省をフィールドとして-』平成15年度～17年度科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書：7-178
- 森隆男 2012『住まいの文化論』終風舎
- 森隆男 1996『住居空間の祭祀と儀礼』岩田書院
- 森幹男 1978「ベトナム 自然との融和」『東南アジア-土俗の探求-』平文社：1-6
- 桃木至朗 2011『中世大越国家の成立と変容』大阪大学出版会
- 守屋美都雄訳注 1978『荆楚歳時記』平凡社
- 柳田國男 1990(1944)「火の昔」『柳田國男全集 23』ちくま文庫：197-365
- 柳田國男 1940「蘆刈と竈神」「炭焼小五郎が事」『海南小記』創元社

- 山田幸正 2005 「全国民家調査からみた越族住居：北部民家の系統と中・南部民家の系統」『ベトナム伝統住居の体系的研究II-文化財保存の国際協力-』昭和女子大学国際文化研究所紀要 Vol.10:47-52
- 山田実加子 2006 「ドゥオンラム村の住生活」『ハタイ省ドゥオンラム村集落調査報告書』昭和女子大学国際文化研究所紀要 vol.11：140-145
- 山本達郎 1975 『ベトナム中国関係史 曲氏の台頭から清仏戦争まで』山川出版社
- 吉田直子 山田幸正 1999(2001) 「トゥアティエン・フエ省の伝統的民家」『ベトナム伝統住居の保存と再生』昭和女子大学国際文化研究所紀要 Vol.5：22-37
- 吉岡義豊 1952 『道教の研究』法蔵館
- 吉岡義豊 1974 『現代中国の諸宗教』佼成出版社
- 余瀾 1998 「中国かまど神と農耕儀礼について-地方誌民俗資料の整理を中心にして-」『人文学報』第 292 号 東京都立大学人文学部：103-118
- L.カディエール（樫永真佐夫訳） 1999 「中部ベトナムにおける木霊崇拜について」『ベトナムの社会と文化』第1号 風響社：349-381
- 和歌森太郎 1972 「家の神ごと・ところの祭り」『神ごとの中の日本人』弘文堂：83-109
- 和田正彦 1999 「大南一統志」「大南會典事例」「歴朝憲章類誌」石井米雄監修『ベトナムの事典』同朋舎：193-194, 349
- 渡邊欣雄 1991 『漢民族の宗教 -社会人類学的研究-』第一書房
- 綿貫志野・中川武ほか 2006 「南郊壇の配置計画についてI ヴィエトナム・フエ・阮朝王宮の復原的研究（その123）」『関東支部研究報告集』：377-380

写真・図表・資料 一覧

図 1-1 ベトナムの地図	16
図 1-2 マンバック遺跡出土の土製支脚 出典:西村 2011:49	18
図 1-3 土製支脚の実測図(フィナー博物館) 出典:梅原 1944:77	19
図 1-4 北九州出土用途不明土器(土製支脚) 出典:小林 1941:281	19
図 1-5 ホイアン旧市街出土の土製焜炉及び土製支脚 出典:昭和女子大学国際文化研究所紀要 1997,2002	23
図 1-6 オジェ編纂の版画に描かれた竈 出典:Oger, Henri 2009(1909)版画は筆者抽出	25
図 1-7 オジェ編纂の版画に描かれた竈神儀礼 出典:Oger, Henri 2009(1909)版画は筆者抽出	33
図 2-1 タイクンの読み上げる祈祷文	51
図 2-2 ホイアン旧市街 事例 1-5、貿易陶磁器博物館の竈と竈神の祭壇の方位	73
図 3-1 ケット氏の家の間取り	92
図 3-2 台所と竈神の配置	93-94
図 4-1 竈神の神像製作工程	115
図 4-2 神像製作の道具	116
図 5-1 シン村の位置 Google Map をもとに筆者加筆	121
図 5-2 版画製作の工程 出典:Huỳnh Đình Kết 2001:78-83 を基に筆者作成	137
図 5-3-(1) フォック氏の色の原料と調合	125
図 5-3-(2) フォック氏の製作道具	125
図 5-4 グエン・ヒュウ・トンとフィン・ディン・ケットの解説	127
図 5-5 シン村の3種類の竈神版画	129
図 5-6 キー・ヒュウ・フォック氏による版画の解説	132
図 5-7 ドンホー版画	133
図 5-8 アンリ・オジェの版画	134
表 1-1 出土遺物からみた竈(土製支脚、土製焜炉)	22
表 1-2 ベトナムの家レベルの年中行事	32
表 1-3 竈神を祀る場所と方位	37
表 1-4 家のなかで祀られる神	38
表 1-5 竈神の神体と新旧交換	39
表 3-1 フェ地域の家庭での年中行事(陰暦)	83
表 5-1 版画の色の原料	138-139
表 5-2 色と原料と調合方法	140
写真 1-1 フングエン文化の土製支脚 4,000 B.P- 3,000 B.P 出典:ハノイ歴史博物館(2013)	18
写真 1-2 ドンソン文化の土製支脚 紀元前3、4世紀-紀元1世紀 出典:ハノイ歴史博物館(2013)	19
写真 2-1 三つの香炉 中央「神霊」	44
写真 2-2 キムラン村の竈神	44
写真 2-3 竈神儀礼のマーセット	46
写真 2-4 グウ氏の家の竈神の供物	46
写真 2-5 ケオ寺 飯炊き競争 陰暦 2010 年 1 月 4 日(2010.2.17)	47
写真 2-6 タイクンの家の祭壇 竈神の香炉(中央) 護符を入れる	47
写真 2-7 香炉に入れる護符の中身 金色紙のなかに包む	48
写真 2-8 鯉を売る人たち	48
写真 2-9 竈神への祈願(上) 祭壇に供えられた供物(下)	49
写真 2-10 グエン・ディ・タイン氏 竈神の祭壇	59
写真 2-11 リュウ・ゴック・ビック氏 竈神の祭壇	60

写真 2-12	フィン・クアン・トゥアン氏レンガの竈と南部地域の特徴的な土製移動式焔炉	60
写真 2-13	庭に置かれた祭壇	61
写真 2-14	スェン氏の竈神の供物	62
写真 2-15	1年最後の儀礼	62
写真 2-16	ホーチミン市の市場で購入 マーセット (上) 右下の資料拡大 (下)	63
写真 2-17	安富亭の竈神	64
写真 2-18	富潤亭の竈神	65
写真 2-19	事例①書法邸の竈と竈神	72
写真 2-20	事例②チャン・ティ邸の竈と竈神	72
写真 2-21	事例③安順邸の竈と竈神	72
写真 2-22	事例④クアン・タン邸の竈と竈神	72
写真 2-23	事例⑤ドゥック・アン邸の竈と竈神	72
写真 2-24	貿易陶磁博物館	72
写真 3-1	祥光寺の竈神の疏文	81
写真 3-2	ホー・ヴァン・イム氏の竈神	81
写真 3-3	新年儀礼 学科長室にて	83
写真 3-4	男性の本命神 (左) 香炉三つ 女性の本命神 (右)	84
写真 3-5	本命神の儀礼(陰暦1月9日0時)	85
写真 3-6	屋外に建てられた二つのアム	86
写真 3-7	レ・チョン・ダオ氏の竈神の祭壇 昔の炉と竈神 (左) 現在の台所 (右)	88
写真 3-8	レ・チョン・ダオ氏の本命神 (上) 祖先の祭壇 (下)	88
写真 3-9	ケット氏の竈神儀礼 家のなか竈神祭壇 (左) 竈神の見送り (中) 供物 (右)	90
写真 3-10	祀廟での竈神見送り 23日0時過ぎ (上) 昼 (下)	91
写真 3-11	ケット氏の家 正面 門と障壁 (左) 主屋と付属屋の外観 (右)	92
写真 4-1	現在の竈神の神像	100
写真 4-2	フエ地域の台所と竈神の神像	101
写真 4-3	見送りされた神像の一部	101
写真 4-4	野菜と一緒に売られる神像セットと櫛と鏡	102
写真 4-5	ロイ氏のセメントの型	103
写真 4-6	フォックティック村 手で土を捏ねて成形した土製支脚	104
写真 4-7	フォックティック村 土製支脚と型	104
写真 4-8	フォックティック村の神像	106
写真 4-9	トゥ氏の家の台所	105
写真 4-10	フォックティック村博物館 昔の炉と竈神 (展示)	105
写真 4-11	フン氏の製作する神像 オンタオ・クアン (中) オンタオ・グオイ (右)	106
写真 4-12	フン氏の現在の型	107
写真 4-13	ズック氏の竈神神体 祭壇 (上) 土製支脚 (下)	109
写真 4-14	ナム氏の竈神神体	110
写真 4-15	ヴォー氏 (4兄弟) 神像の型 オンタオ・ロン (左) オンタオ・グオイ (中) オンタオ・クアン (右)	111
写真 4-16	ムオイ氏の神像 製作と型	112
写真 4-17	箱型レンガ窯	116
写真 5-1	シン村の亭 新年儀礼 版画業の始祖への儀礼 陰暦1月9日 (2016.2.16)	122
写真 5-2	亭での奉納相撲 (上) 村の広場での相撲 (下) 陰暦1月10日 (2016.2.17)	123
写真 5-3	竈神の版木と版画	126
写真 5-4	版画業の始祖への儀礼 参拝に来た2人 ファン・ティ・キー氏 (左) チャン・ティ・セン氏 (右)	137